

女教師の処遇

山川教頭の自宅では明後日に迫った職員会議での戦略について、深夜近くまで議論が及んでいた。

居間には三人の栄宮学園の教師たちがくつろいだ格好でとぐろを巻いている。

「情勢が吾が軍に圧倒的優勢ということには間違いない」

体育教師の宮城靖がいった。角刈りでがっしりとした体格。まだ三十代前半と若く、山川派の行動隊長というところである。栄宮学園の創設者、宮城太輔の孫にあたり、学園で隠然たる勢力をもつ宮城一族の一人だ。

「横内まゆみの退学に賛成の者が全教員の四分の三、残りのほとんどは中間派、というより無関心派といったほうが当たっている。現在まで鮮明に反対を表明しているのは、ようするに、吉沢先生ただ一人というわけです」

学年主任の鈴木が分析をまとめたレポート用紙をテーブルに広げた。教師たちの名前がすべて表にしてあり、思想調査の結果が細かく記入されている。その中で、吉沢千夏の欄だけが赤鉛筆の丸で囲まれていた。

「まったく。吉沢先生がいなければ、この栄宮学園も

順風満帆なのですがねえ」

と山川。後退が目立つ生え際と縁なし眼鏡が彼を典型的な教頭先生のイメージにしている。

「ま、とりあえず、一息いれますかな」

山川は台所からウイスキーとつまみをもってきた。彼のブタ妻はとっくに自室にこもって高斟だ。

三人は小宴会をはじめたが、口をつくのは吉沢先生への恨み言ばかりである。

「今日もあいつ、体育教官室に乗り込んできましてね」

靖はフロアのカーペットのうえに胡坐をかき、スルメをくわえながら言うのである。

「一人で？」鈴木が驚いた表情で尋ねた。彼はずんぐりとしたアンコ型で、生徒からは相撲取りのしこ名がニックネームとしてつけられていた。

「もちろんですとも。あそこにズカズカ踏み込んでくる教師なんて、吉沢先生しかいないですよ」

「ほほう、悪の巣窟、体育教官室に単身切り込むとは我らがマドンナもたいした根性ですな」

山川は自嘲気味に言った。表情はげんなりと呆れ返っている。

「教頭、マドンナなんて、誉めすぎですよ。アマゾネスといったほうがいい。可愛げのかけらもないんだから」

靖はまた頭に血が昇ってきたらしく、小鼻がふくらんでいる。山川は慌ててウイスキーをつぎ、宮城一族の末裔の機嫌をとった。上司ではあるものの、プライベートな席では立場が逆転するのだ。給与も人事権も一族が握っているのだから仕方がない。

「で、どうだっていうんですか。吉沢先生は？」山川は自分のグラスにもつぐ。

「俺が吉沢先生のクラスの阿部を殴ったのはどういう理由か、と、まあ、いつもの剣幕ですよ」

「阿部を殴ったの？ 靖君？」鈴木は興味津々の顔つきだ。

「阿部といえば……鈴木先生？」と山川。

「またあ、教頭、トボケちゃって。阿部麻衣ですよ。知らないわけないでしょう。ミス栄宮ですよ」

鈴木は口元にいやらしく笑みを浮かべ、眼を薄く開けた。

「おうおう、あの学園祭のコンテストで選ばれた彼女ね。うん、覚えてる覚えてる」

「ヒヒヒ、教頭がいちばんご執心だったじゃないですか。美人コンテストなど、あたらし風紀を乱すだけの校則違反だとかなんとか言って、企画した生徒ばかりか参加者の女子生徒にもきつい御灸を据えたんだから。みてましたよ。阿部麻衣の肩を撫でまわしたり、頭髪に触ったり、したい放題してたんだから。いつあの可愛い胸に夕

ツチしないかとハラハラしてましたよ、私は」

「鈴木君、キミ、酔ったらいかんよ。事実を誇張しすぎですよ。私はただ落ち込んでいる生徒を前にしてだ。ね、どうやって励まそうかとだね」

しかし山川の相好も栄宮学園一番星の美xxの柔らかい黒髪感触を思い出したのか、淫靡に崩れだしている。

「そうか、あの阿部麻衣を殴ったのか、靖君は。そいつは聞き捨てならないじゃないの」

「教頭。あんた、どっちの味方なんです？ しっかりしてくださいよ」

靖はふくれっ面だ。

「私かい？ 私はそりゃ、正義の味方ですよ」

他の二人は白けた表情になる。

「冗談はさでおき……」山川は咳払いをしながら言った。「阿部麻衣は体罰を受けてしかるべき校則違反をしたと言うわけだね」

「そうですよ。阿部は生理で体育の時間を見学していたんですが、いつのまにやら居なくなって、購買部で買い食いしていたんです。どうやら生理のほうも嘘らしい……」

「宮城先生の授業はハードですからねえ」

生徒がサボタージュしたくなるのも無理はないと言いたげな鈴木は柿の種を口に放りこんだ。靖の体育の授業

は授業と言うより、シゴキと呼んでよく、生徒たちからは恐れられている。

「それで一人体育館に残して、フロアの雑巾がけを命じたわけです」

靖はこともなげに言うが、あの広い体育館を一人で雑巾がけとはきつすぎる。しかし他の二人の教職者は阿部麻衣の汗ばんだ美貌と、体育着のショートパンツをはきらんばかりにパンパンにさせた若いお尻を突き上げて、ブリブリさせながら四つん這いで雑巾がけする姿を思い浮べ、まったく猥褻な欲望をたぎらせている。鈴木などは体育教師の免許を取得しなかったのを地団駄踏んで後悔しているのだ。古典担当ではこんな美味しい場面に出くわすなどまずないのだから。

「そのあと、正座させて一発ビンタを飛ばしたわけです」

私立栄宮学園では体罰は半ば公然と行なわれている。もちろんすべての教師がやるわけではなく、体育教師を中心としたいわゆる武闘派の面々が愛の鞭と称して男女を問わず生徒に暴力をふるっているのだ。これはもう、一種の校風として定着しており、異を唱える教師も親も少ない。皆無である校内暴力を理由にかえってPTAでは奨励している節もあるくらいだ。もちろんただ一人、吉沢千夏先生を除いてである。

「……それが気に入らないと嘴を挟んできたわけだ。

千夏が」

かなりアルコールが回ってきたらしく、鈴木は吉沢先生の名前を呼び捨てにした。

「まったく頭にきますよ、あのチビには」

靖は角刈りの頭をボリボリとかいた。吉沢先生はこの春の身体測定の時のデータをみると、156センチということになっている。山川教頭と鈴木学年主任はまたまた想像力をふくらました。小柄な吉沢先生が180センチをゆうに越える巨漢の靖を睨みつけるようにみあげ、まくしたてている勇敢な姿を。それは、けっこうあぶない状況でもあるのだ。一般の教室から遠く離れた体育教官室という密室で二人の若い男女がキリキリと対峙しているのである。一方は精力みなぎる暴力男、一方は無防備で華奢な身体つきの男好きする女教師だ。アダルト小説なら次の場面は誰の眼にも明らかだろう。

「よほどあのこまっしゃくれた顔を張り飛ばしてやるかと思いましたよ」靖は忿懣やるかたないといった顔で吠えたてた。「あなたは教師として失格じゃないですか、とまで言われたんですからね」

「そいつはひどい」

「先輩に対しての尊敬の念がまるで感じられないじゃないか」

二人は靖の肩を持って口々に吉沢先生の行状をまくしたてた。

まず鈴木が、「懇親会の時に私がちょっと手に触れただけでセクハラだなんだと大騒ぎしたのを覚えていますか。ようするにヒステリーなんだな」

「鈴木君、手に触れただけなんて、キミ、しっかり彼女の上に浴衣の前を肌けてのっかっていたじゃないか。アレはセクハラですよ。思いっきり」

「ン？ そうでしたっけ……」

「グデングデンに酔っ払っていたから何も覚えていないんでしょう。その点、私は完全なる被害者といっていいでしょ。吉沢先生が新人の時の研修会で肩を抱いたら……」

「なんで肩を抱くんです、新任研修で！ 業務中でしょうが」

反撃にでる鈴木。

「フッフッフ」不敵に笑う山川。広い額がテカテカと光っている。「フォークダンスを教えていたんですよ。れっきとした大義名分があるじゃないか」

「フォークダンスなんて」鈴木は頭を抱えた。「研修のメニューにあるほうがおかしいんだっ」

「彼女もそういう疑いをもっていたがな」

「誰だってもつってば」

「とにかく肩を抱いて手を握り合って、ステップを踏んでいたんです。頃合いをみて、すっと指をすべらせて指の先でTシャツのオッパイの真ん中をなぞったら、も

うそれはエライ騒ぎで……」

ブー垂れる鈴木に山川は爪のほんの十分の一ミリ程度が乳頭にかすっただけだと弁明にこれ努めている。

「お二人ともいい加減にしてくださいよ」と靖はげんがりしている。「俺のことをほったらかしでそっちだけで盛り上がりませんか」

おー、そうだったそうだったと二人は相次いで靖のグラスにボトルを傾けた。

「しかしなんですかなあ」鈴木はマイルドセブンに百円ライターで火を付けながらふと言った。「吉沢千夏のことになると、我々はどうしてこう、熱くなるんでしょうなあ」

「いや、まったく。主任のいうとおりです。ついつい昂奮してきますね。女教師は吉沢君ばかりというわけじゃないのに」

と、山川はサラミに醤油をつけてかじりついた。そして大型テレビのスイッチをつけ、ビデオデッキにカセットを装填した。リモコンで操作し、ビデオを再生させる。八ミリビデオカメラで撮影した栄宮学園の校舎が映っている。早送りで画面を進ませると、教室の場面になった。『二年C組』の札が戸の前にかかっている。戸が開かれ、どンドンとカメラは教室のなかへ入っていった。教壇に立っていた小柄な女教師がギョツとしてこちらを向いた。

「ああ、千夏……」

鈴木が呻くようにモニターに見入っている。

女教師はセミロングの髪を後で束ね、前髪を額に垂らすヘアスタイルだ。青いブラウスの上から白の清楚なカーディガンを羽織り、スラックスをはいている。彼女は教壇をおり、カメラに近付いた。最初の驚いた表情は去り、悪戯っぽいいたしなめるような笑顔になっている。ビデオが彼女の顔をアップにしたまま、ポーズし、画面のしたに素人くさい文字でテロップが流れた。

『吉沢千夏26才、国語教師。短気でおっちょこちょいだが、愛すべき我々の先生。独身。ただ今恋人募集中。『バストはないがヒップはある』が、売りとのこと——』

これは放送部が毎月一名の教師を選んで紹介する学内放送番組のために作ったビデオである。いつもは当たり障りのないプログラムが多いのだが、人気抜群の吉沢先生の回なので、授業中に突撃リポートを試みたわけだ。当然、スタッフ一同は自分の授業をサボっているわけで問題になり、また内容にも、疑義あり、の検閲結果がでて、吉沢先生本人のとりなしも実らず、ビデオは没収。放送部は謹慎を命じられた。

没収されたビデオは秘密裏に山川が手中におさめ、ことあるごとに彼のテレビに不倶戴天の敵の笑顔を映しているのだった。

ストップモーションの吉沢先生のアップ——。

「我々にはこんな笑顔、一度だって浮かべたことはありませんよ……」

鈴木が嘆息するほど魅力的な笑みとっていい。笑うと眼がなくなるタイプで、通った鼻筋に小皺が刻まれている。顔全体は小作りで口もおちょぼ口である。絶世の美女ではないが、どこか男心をくすぐる放ってはおけない雰囲気をもっていた。しかしこれに騙されると火傷をするわけだ。頭脳の回転が早く、舌鋒も鋭い。進歩的な考えの持ち主で行動力に富む。まったくもって栄宮学園の校風とは水と油の存在なのである。

また早送りボタンが押されると場面は一転してプールサイドに切り替わった。検閲委員——山川と鈴木である——から疑義を差し挟まれた箇所である。カメラはクラス対抗水泳大会を撮影していたのだ。栄宮学園では年に一度の水泳大会において、担任の教師も生徒に混じって泳ぐのを基本としている。むろん泳ぎの達者な吉沢先生も水着にきがえて選手の列に並んでいる。女子の水着は校則で紺のスクール水着と決められていて、これも揃いのピンクのスイミングキャップをかぶった発育豊かな生徒たちが賑やかにふざけあっているのだが、吉沢先生もほとんど同じスタイルで柔軟体操をしていた。

「何も教師にまで校則が適用されているわけじゃなし、26の女がスクール水着とはけしからん」

山川は繰り返しこのビデオのこの場面をみているくせに、いつも同じように憤慨していた。鈴木も靖も山川邸を訪れるたびに教頭にせがんでみているのだが、やはりいつも昂奮を隠せない面持ちであるのだ。さすがの彼らも大会の時にはジロジロと眺めるわけにもいかないが、こうしてビデオともなればじっくりとアマゾネスの貴重な水着姿を堪能できる。

足首の運動を終えた吉沢先生は立ち上がり、両手を組んで頭上にかざし、大きく伸びをした。小柄ながら吉沢先生はプロポーションの均整がとれている。顔が小さく手足が長いのだ。やや小さめの胸からウエストのくびれ、そして女生徒のそれよりも丸くて巨きなヒップがワンピースの水着にぴっちりと包まれ、素敵であった。剥き出しの肩は撫で型で女らしく、胸もとや下肢とともに真っ白い肌を見せ付けてくれる。

「おっ。例の阿部麻衣が後を横切りましたぞ」

山川はテープを巻き戻した。なるほど、吉沢先生の背後をひときわ目を引く美xxが友達と笑いながら歩いている。眼がパッチリとして濃い眉をもった現代的な美貌である。165センチはあるだろうか。胸も巨きくて小さなカップからこぼれおちそうだ。これは去年の撮影だから、今はもっと熟れているのだろう。しかしそれにしても、あの薔薇色の頬を宮城靖のごつい手がピシャリとやったのだと思うとグッとくるものがある。

「ククク、阿部麻衣の半分くらいしか、千夏の胸はないじゃないですか」と鈴木は身を乗り出した。「お尻だってちょっと小さいくらいで、ほとんど遜色はない」

「しかしね、鈴木先生。やっぱり何となく違うでしょう。なんというかなあ。言葉ではうまく表現できないけど、こう、男を知った女の身体とそうでない貴娘の身体と」

山川はとくとくとして喋っている。いつのまにか教頭も千夏と呼び捨てだ。

「肌の色ですよ。肌の」靖も怒りをどこかに忘れて映像にのめり込んでいる。「輝きがハッキリ違いますね。どちらも雪白だけれども、麻衣のは健康的で太陽光線に負けずに、それを跳ね返すようにピチピチと輝いているが、千夏のは乳白色っていうんですか。女性ホルモンがさかんに分泌されていて、どこか烟るような白さなんだな。もちろんその女性ホルモンは精液を子宮に浴びることによってドクドクと沸いてくるんです」

「あれま、宮城先生。ずいぶん理論的なんですねえ」

「いやだなあ、主任。俺はこれでも保健体育の教師ですよ」

「おお、そーだったそーだった」

カラカラと脳天気には笑いあう三人は次に映しだされたレースの場面に釘づけとなった。号砲一発プールに飛び込んだ各クラスは、次第にそれぞれの技量に応じて差が

ついてきたが、第二泳者の阿部麻衣から二年C組の独泳となった。見事なクロールが青々としたプールを突っ切っていく。のびやかな四肢を生かした力強いストロークが水をとらえ、グングンと段違いの速さだ。

「みたまえ、ブスと美人の差だよ」

「あのプールの水で水割りつくったら、どんなにうめえだろうなあ」

「教頭、ハイビジョン買いなさいよ。陰毛が透けて見えるかも知れない」

教職の地位にいるものとは思えない発言がぼんぼんと飛び出してくる。

阿部麻衣は圧倒的に差をつけて第三泳者にタッチした。吉沢千夏先生の小柄な身体がしなやかにプールに入水した。吉沢先生は豪快なバタフライで泳ぎだした。彼女は学生の時に選手をやっていたこともあり、生徒たちとハンディをつける意味でクロールは禁じられているのだ。身体がくの字になるたびに、濡れた臀部がもっこりと水面からあらわとなる。水着がピッチリと貼りついたその丸みは豊満で、満員電車なら痴漢の好餌となるのは受け合いだ。さて、ハンディを付けても、吉沢先生と他のクラスの生徒たちとの差はいっこうに詰まらないまま、アンカーにバトンタッチされた。阿部麻衣や吉沢先生を差し置いて、絶対本命の二年C組の最終泳者に選ばれたのは誰か。

「横内まゆみ……」

誰かが呟くと、三人は一様に淫猥な表情を浮かべる。麻衣や吉沢先生に向けられる視線も好色には違いなかったが、あくまで憧憬であり、夢想だった、しかしビデオの中で、声援している全校生徒の度胆を抜くスピードを披露してる、小麦色のピカピカの肌をもったxxへ向けられたそれにはザラザラした感情しかない。憧れの映画女優を見つめる視線と、ストリップに興じるヌードダンサーをネメつけている視線ぐらいには違いがあるだろう。

そうなのだ。この横内まゆみという女子生徒の肉体を、三人の悪徳教師たちはすでにたっぷりと陵辱しているのだった。まゆみは一年生の頃からいわゆる不良生徒で、管理主義の徹底した栄宮学園では完全にアウトロー的存在であった。ただ、最初はとくに弱い者いじめをしたり、意味もなく暴力をふるったりするような生徒ではなかった。基本的に押しつけられるのを極度に嫌う自由奔放な性格で、天気がいいとバイクにまたがり、ぶっ飛ばさずにはいられない衝動を身内に抱え込んでいる。だから暴走族のように集団で幅をきかすというようなことはしない。不良なのではなく、愛すべきキャラクターといったほうが当たっているのだが、○校に栄宮学園を選んだのが、彼女の不幸の始まりだった。彼女の天衣無縫さはことごとく校則違反で、懲罰の対象となったのは言うまでもない。まゆみの美貌に目を付けた山川たちはある

意図をもって、彼女を陥れるべく、不良キャンペーンを陰湿に繰り広げた。曰く、横内まゆみの母は水商売関係者で彼女は私生児だ、不純異性交友に溺れている、といった、事実を誇張したものまで、それを小出しに出して追い詰めていくのである。

計画では、二年生の夏休みまでにはまゆみを自主的に退学させ、行き場の失った彼女に救いの手を差し伸べる名目で、山川教頭が仕事の口を紹介する手筈だった。もちろんその仕事とは可憐なxxの肉体を食い物にするヘルス関係のものである。山川たちはこの内職をもうかれこれ数年前からつづけているのだった。入学してくる女子生徒の家庭調査からターゲットを絞り、罠にかける。いや、教頭たちの個人犯罪というより、学園ぐるみ、組織ぐるみ、といってもかまわないだろう。さらにそのよからぬ風俗店を牛耳っているのが宮城一族に縁浅からぬ暴力団関係者だから、学園を隠れ蓑に人身売買のスカウト事業をやっているようなものなのだ。

彼らの毒牙にかかったxxたちは一年に一人ないし二人ではあるものの、現役女子校生、しかも選りすぐりの美xxなので、教頭たちの裏の預金通帳に少なくない副収入をもたらしているばかりか、なんと彼らもしゃあしゃあと肉奴隷にされたxxたちの客となって悦楽を貪っているのである。

いつもの計画は万事順調に進むはずだったが、まゆみ

はなかなか気が強く卑劣なキャンペーンにもめげなかったし、なんといっても彼女の担任の吉沢千夏が存在が大きかった。吉沢先生はまゆみの気性のよき理解者となり、励まし、叱り、時には一緒に泣き、あるいは共に闘い、彼女を学校側の攻撃からかばったのだ。

山川たちは焦った。なぜならxxの商品価値は年齢で大きく差がつくのである。十〇歳になれば、つまり三年生に進級すれば、ほとんど大人だから、女子校生の付加価値はあまりない。下の学年との差が一千万をくだらないとすれば彼らが血眼になるも当然だ。

まず夏休みに厄介者の吉沢先生を研修の名目で沖縄へ派遣し、まゆみを孤立させた。そしてまゆみの『素行記録』——本来は担任の教師が厳重管理している——を改竄し警察に流出させ、マークさせる。栄宮学園の中退者がヘッドをやっている暴走族を焚き付け、まゆみを挑発する。うっかりそれにのったまゆみは傷害沙汰に巻き込まれて警察に補導されてしまう。そこへ山川教頭が勇躍乗り込み、警察と話をつけて彼女を受けだす。すっかりまゆみを信用させておいて、次には吉沢先生の偽善者ぶりを植え付ける。なぜ彼女は沖縄から飛んで帰ってこないのか——じつは連絡をしていない——、なぜ素行記録が警察へ渡ったのか、吉沢先生には結婚の噂があり、お前との親密ぶりをフィアンセから疑われているので鬱陶しくなってきたようだ、等々。虚実とり混ぜてまゆみを

洗脳したのだ。信頼していただけにまゆみのショックは大きかった。とりわけ素行記録に母親の履歴について、先生がいつも口で言っていたことと正反対の内容が書かれていたのにはショックを乗り越えて憎悪を呼び起こしたようである。夏休みに、まゆみは荒れに荒れまくった。自暴自棄になり、素行記録に書かれていた行為をすべてやってやれとばかりに暴力事件を頻発させた。ついには山川たちの取引相手とも知らず風俗関係者の手中に落ち、因果を含められたのである。

沖縄から帰ってきた吉沢先生の当惑が甚大であったのは言うまでもない。あれほどやる気を起こし、たとえば水泳大会みたいな集団行動にも積極的に参加するようになってきたまゆみのこの崩れようにオロオロするばかりであった。まゆみに会っても取りつく島がなく、逆に唾を引っ掛けられる始末であった。山川たちは千夏の監督不行き届きを激しく責めたて、だから放任主義は駄目なんだと日頃の鬱憤を晴らすように包囲網を狭める。むろん千夏にとってはそんなものはどうでもよく、心配はまゆみの目を覆うような非行ぶりであった。

完全に初期の目的を達成した山川たちであったが、方針を一部転換することにした。まゆみを放校するのではなく、このまま学園生活をつづけさせるのである。かねてより、風俗関係者から現役のままであれば、つまり毎朝制服の袖に腕を通してしているような新鮮なxxであれば、

買値を倍にしようと、申し入れがたびたびきていたのだ。それはあまりにも危険すぎるので今までは二の足を踏んでいたのだが、まゆみの崩れようからして大丈夫と判断したのである。それに何かと小うるさい吉沢千夏の封じこめにも役に立つだろうと思われた。彼女の自由放任主義の敗北のモニュメントとして廊下を歩かせておくのは痛快といえる。

こうして横内まゆみは現役女子校生娼婦としての人生を歩きだしたのだが、その一番の客となったのが、我らが三銃士だったわけだ。もちろん覆面をつけて正体を明かさない方法をとったが、一晩中三人がかりで姦しぬいたあの爽快さは今も忘れられない。阿部麻衣のお姫様のような無垢な美しさや、吉沢先生の理知的な美貌とはまた違ったワイルドな魅力がまゆみにはあり、その小麦色の肉体を隅から隅まで堪能したのである。最初はシクシク泣いていたまゆみも中年の執念深い淫技にしだいに破れていき、しまいには若々しい吐淫を露呈して、昇天したのだった。

自分たちの腕のなかで涎を垂らしながら気死した淫売のまゆみの在りし日の姿が、ビデオの中でまばゆく輝いている。ぶっちぎりで優勝を遂げた二年C組の一同は、その立て役者となった三人を取り囲んで万歳をしている。吉沢先生と阿部麻衣と手を取り合っている横内まゆみの、まだ水に濡れたあどけない笑顔のなんといじらし

いことよ。もうこんな屈託のない表情は彼女の人生には二度とお目にかからないのだろうと思うと、山川教頭が目頭もふと熱くなる。そして股間もグンと硬くなる。このビデオをみた後は横内まゆみを抱きたくなるのが常なのだ。

「こんないい商売、世の中にありませんよねえ……」
靖が長嘆息する。ズボンもテントを貼っているのだった。

「そうだよ。靖君。こんな、世界の男から羨ましがられる環境は決して手放しちゃいけないんだよ、うむ」鈴木主任も同感している。「石にかじりついてもあるさっての職員会議を乗り切らねばならないんだ」

ビデオが終わり、エンドマークと共に吉沢先生の顔が再びアップとなった。素肌の匂いが漂ってくるような化粧っ気のない顔は生徒たちに囲まれてこれ以上ないように幸せそうだった。

「畜生っ、牝狸めっ」

山川が吐き捨てるように言った。苛ついて氷の融けたグラスにウイスキーを注ぎ、ストレートでグビグビと一気に飲みだ。

「あ、あ、教頭、また血圧があがるってば」

鈴木が太鼓腹を揺すって山川からグラスを取り上げる。

「冷静に手を考えなきゃ」

三人を悩ましている案件とはこうだ。

山川たちの徹底した弾圧に一時的に沈黙していた吉沢千夏であったが、最近、復活の兆しをみせているのである。どうも、横内まゆみの一件の背後に何か黒いものが蠢いていると、感付きはじめたらしいのだ。まゆみの後を尾行したりして、証拠を集めている節がある。事が事だけに山川たちは慎重を期すことにした。やはりまゆみを機をみて退学処分にしてしまう算段をたてた。しかしその急な動きがかえって吉沢先生の疑惑を招き、あさっての職員会議——まゆみの処分を決めるために開かれる——では一波乱も二波乱もあるのは必至の情勢なのである。会議のメンバーの圧倒的多数を押さえているとはいえ、何しろ相手は吉沢千夏である。どんな隠し玉をもっているか知らず、戦々競々としているわけだ。

「いっそ殺しちまいましょうか」

宮城靖があえて軽い調子で口にした。

「キミ、不謹慎なことを」

不謹慎極まりない悪事を働いている己れの行状を忘れてたしなめる鈴木。

「簡単ですよ。あの細い首の骨、あっさりへし折る事ができる」

「無茶いわんでくれよ」

靖が冗談でいっているのはハッキリしているが、山川もちよっと脳裏をよぎっていたのだ。

「あまりにもリスクが大きすぎる」

「誰かに頼むというのは。うちの親父のやっている会社にはそれ風のヤクザがうじゅうじゃいますがね」

「そんなところの人間を使って、もしパクられてみる。芋蔓式に我々もあげられちまう。殺すなんて非現実的だよ」

「姦しますか。三人で夜討ちをかけて、ぐうの音をあげられなくなるまで、ハメまくるというのは？」

鈴木が笑いながら手を振った。

「あの千夏がレイプ如きでぐうの音もあげられなくなるなんて信じられないね。すぐに警察へ駆け込んで大騒ぎするに決まっているよ」

「じゃ、どうすればいいんですよ！」靖の声は悲鳴に近かった。「教頭も主任も、今日の体育教官室に駆け込んできたあいつの顔を見てないから、そんなに甘っちょろいことを言えるんですよ。あの自信たっぷりの顔。きっと何か掴んでいるんだ。でなかったら、『あなたを先生と呼ぶのは今日で最後になるかも知れませんわね』なんて、言うはずがないもの」

今度は靖が氷ごとウイスキーを食らい、憤然とした顔でボリボリとかじりはじめた。

「千夏はそんなことを言ったのか。可愛い顔をして攪乱しようとしているんじゃないか」

しかしそういった山川も心中穏やかではない。その意

味ではすでに攪乱されているとあってよかった。

「やっぱりこうなると、村の長老の意見を聞くよりないんだろなあ」

「長老？」鈴木がおうむ返しにする。「すると……」

鈴木と山川の視線が靖に集中した。靖はかじっていた氷を吹き出した。

「そりゃないっすよ。おじきに頭を下げるんですか？」

「だってキミの叔父さん、昔は陸軍中野学校にいたんだろ。いい知恵を出してくれそうじゃないか。戦略家としてはうってつけじゃないの」

「中野学校なんて本人がそう言っているだけで、どこまで本当の話しか、わかったもんじゃないですよ」

じつは靖の叔父の宮城寛治は元栄宮学園の教師で三年前に退職している。靖と同じ体育教師で、戦中時代を思わせる鉄拳教育は生徒ばかりか教師たちにも恐れられ、治外法権のようなご意見無用の存在だった。正式な退職年齢の六十五歳がきても堂々と居座りつづけたが、誰もやめさせることができない。結局、七十三歳のときに正規の退職金の倍をだすからと校長が土下座して、お引き取り願ったのだが、当然のように校長の目のまわりには大きな痣ができたのであった。

今も柔道部の合宿場に自宅を改造して提供しているし、ときおり学園にもふらりと現われて、めざとく校則

違反の生徒を見付けるや、往年の体罰をお見舞いする。昔を知らない新入生たちはわけのわからない爺さんが校舎をうろついている理由を先輩から聞かされて慄えあがるのである。

宮城寛治の越権行為には教師たちも迷惑顔だが、七十五歳をすぎてもなお矍鑠として体力の衰えない宮城一族の長老には手も足もでない。甥の靖などはそのさいたるもので、寛治は靖を栄宮学園における自分の後継者と考えているらしく何かと口うるさく説教を垂れるのだ。

こういったわけで、山川教頭が寛治の名を出したとき、靖は極度に不快な表情をしたのである。あの叔父に頭をさげるのはなんともプライドが許さない。

「靖君！」山川は靖の手を取って、懇願した。「今はプライドなんて言ってる場合ではないだろう。我々の人生の最大の危機であるんだよ。ここをうまくしのがなければ、我々はこの地位を失うばかりか、手が後ろに回ってしまうことを忘れてはいけない。寛治先生なら、いい知恵を貸してくださるだろう。泣き付いてみてくれんか。可愛い甥っ子のためだ。一発ぐらい殴られるかもしれないが刑務所よりはいいさ」

「自分が殴られるわけじゃないもんだから、気楽なことを！」

靖は不満たらたらであったが、他に名案もない以上、教頭の要請を拒否するわけにもいかなかった。

寛治老、女教師を叱る

日曜日午前九時——

小さいが小綺麗なアパートの一室で吉沢先生はまだウトウトとベッドの中にいた。世間では三連休だが、彼女は土曜日も学校の仕事で夜遅くまで働いていたのだ。このひとときがもっとも幸福という寝顔であった。花柄の掛け布団から無防備な寝顔が覗き、足が飛び出している。

そのまどろみを破るように来客を告げるチャイムが鳴った。一度、そして二度。居留守は使わせないぞと、断固とした決意を示すように三度目からは連続で押しつづけられる。

千夏はゴロリと転がった。掛け布団を下にして、俯せになる。白のパジャマのズボンが下がって、半ケツ状態になっている。千夏は下着を付けずに寝る習慣なのだ。弛み無縁の尻たぶが、ほんの少し谷間の始まりを見せている。

布団に顔を押しつけていた千夏はようやく起き上がった。ぺたんとベッドのうえにお座りをした彼女は寝呆け眼をこすり、口元のヨダレを拭いた。ポニーテールにしている髪が眠気を追い払うように振られた。額に垂らし

ている前髪が眉にまでかかっている。

チャームはしつこく彼女を呼んでいる。夢遊病者のように赤いガウンを羽織り、よろよろと立ち上がった。本能的に下がっていたズボンをずりあげる。

「どなた……」我ながらひどい声だと思った。二日酔いの後のような声だ。

「どなた？」千夏はもう一度言った。

「……お届け物ございます」

嗚れ声は明らかにいらついていた。

（お届け物でございます、か……）

千夏は小声で復唱しながら扉の覗き窓に片目を近付けた。青い宅急便会社のユニホームを着た男が箱を抱えて立っている。帽子を目深にかぶっているので顔はわからないがなんとなく高齢者のような気がする。

「今、開けます——」と千夏は扉のチェーンを外した。ロックを解除、ノブに手をかけようとしたとき、凄い力で扉が開いた。

「ン？」何事かと驚く千夏。

「何を愚図愚図しておるっ」

宅急便の配達人はズカズカと玄関に入ってきた。狭い空間で勢いよく入ってきたものだから、男の胸に千夏は鼻面をしこたまぶつめた。彼女は小柄だが、男もけっこう身長があり、そんなことになってしまうのである。千夏は驚いて後退したが、それが男の侵入をさらに促す結

果になった。

「なんですか」 やっとそう言った千夏だが、男は背後でガタンと扉を閉めた。そして靴まで脱ぎだすのである。「ちょ、ちょっと、何の真似です？」

今はすっかり眠気など吹き飛び闖入者へきつい表情を向ける千夏。

「客に向かってなんの真似とは礼儀知らずな口の聞き方じゃ」

男は言い、とうとう部屋にあがってきた。

「近ごろの若い娘はまったくなくなっらん。今何時だと思っているのだ」

「あなたはいったい誰なんですっ。大声、出しますよ」

気丈な千夏は男を睨みつけた。

「わしか。わしはあんたの先輩じゃ」

男は帽子を取り去った。中から鮮やかな白髪が現われた。妙に艶々した老人の顔がそこにあったが、それは千夏の見覚えのある顔だった。

「寛治さんね！」

千夏の警戒レベルが十から九にダウンした。しかし得体の知れない暴漢者でないのがわかっただけで、ちっとも事態は理解できない。なぜ、ここにあの宮城寛治が乗り込んできたのか……。すでに引退したはずなのに学園を我がもののように闊歩し、生徒を殴り、とくとく説教

していくこの老人を千夏が快く思っているわけがなかった。かつての職場に未練を残す老人は多いが寛治の場合は度がすぎる。それを野放しにしている学園も学園で、この寛治の存在が栄宮学園を覆う病の象徴と言ってもいいだろう。千夏はそう考えていた。むろん教師たちにも口を挟むこの老人が、もっとも進歩的である吉沢先生と衝突していないわけはなかった。二年C組の生徒はたるんでおると、ホームルームの時間に教室へ怒鳴りこんできたこともあった。すべてがエキセントリックなアナクロニズムなのである。

「他の教師は『寛治先生』と親しみをこめて言ってくれるのに、あんたはいつも『寛治さん』じゃな」

寛治はしわくちやの口元を丸めてホッホッホと笑った。

「まあ、座りなさい」

テーブルの椅子を引いて勝手に腰をおろし、千夏に進める凶々しさである。

「勘違いしないでください。ここは栄宮学園ではなく、私の部屋ですわ。私の許可もなく上がり込んでいいと思っているんですの」

皮肉を言ったつもりだが、寛治にはまったく通用せず、彼は不躰な視線を部屋のなかへうろつかせている。

「女らしくない部屋だ。掃除をちゃんとしてないだろう」

煙草を取り出し、火をつけた。いよいよ不法侵入を既成事実化するつもりらしい。

「いいですか。寛治さん！」千夏は腰に手を当ててビシヤリと言い渡した。「あなたも昔は教鞭を執った聖職者なんですから、嘘をついて女の部屋に上がり込むなんていう痴漢みたいなことをやっていいはずがないでしょう。さあ、早くここをでていってくださいっ」

「昂奮するな。女のヒステリーは見苦しいだけじゃ。朝から美容に悪かろう。それ以上、醜女になったらいよいよ嫁のもらい手がなくなる」

憤然として千夏はコードレス電話を掴んでいた。相手にしていたら向こうのペースにはまってしまう。ここは有無をいわせぬ決然とした態度を取るのがよかろう。

「警察だったらうるさがれるのがオチじゃぞ。わしは別に嘘を言ったわけじゃない」

「宅急便の真似をしたじゃない」

「どんな服装をしようが個人の自由。それにちゃんと届け物はあるわけだ」

寛治老人は先程の箱を開けた。中から取り出したのは掛け軸である。パラパラと広げると達筆な草書体で『誠心誠意』と書かれていた。

「これをあんたに贈ろうと思ってきたのだ。あんたにいちばん欠けている徳であり、栄宮学園の教師にはなくてはならない資質でもある」

寛治はその掛け軸を壁にかかっていたポップアートの抽象画を外してその釘に引っ掛けた。寛治のデモンストレーションに呆気に取られた千夏だが気を取り直してプッシュボタンを押した。しかし110番ではなくアパートの管理人の番号である。

管理人は日曜日の朝でもあり、ひどく不機嫌であった。しかも千夏の説明はやはりどこか、しどろもどろなのである。

「それで、その老人は見ず知らずの人なんですか？」

「……いいえ、知っている人ですわ」

「え？ 知っている人なの？ じゃ、窓から忍び込んできたということ？」

「その、玄関からですけど……」

「あのね。吉沢さん。知っている人が玄関からきたんならそれはお客さんでしょう。まあ、日曜日の九時といえは早いかもしれないけど、不謹慎と目くじらたてるほどの時間じゃなし」

「でも、あの……」

「ようするに喧嘩したんじゃないの？ そういうプライバシーをこっちに持ち込まれても困るんだ。あなただって大人なんだから自分で処理してよ。そいじゃ、部屋代を忘れずに振り込んでください。ハイハイ」

あっさり電話を切られてしまった。かえって事態を悪くしてしまったようだ。強行手段は頓挫してしまうと収

拾がつかなくなる。千夏は唇を噛み絞めながら電話を置いた。

「灰皿をもらおうかのう」

寛治はいよいよ椅子にふんぞり返っている。

無視しようとしたが、ラッキーストライクは灰を今にも床に落としそうであった。どうやら、取り合えずつきあわないわけにはいかないらしい。千夏は無言のまま、灰皿をキッチンから出してきて寛治の前に置いた。

「ホッホ、女教師が自分の部屋で胡坐をかきながら、鼻から煙を拭きだしているザマはあまり見たいものではないな」

「私は煙草は吸いません」

「すると恋人のためか」

「来客用です！」千夏は憮然として言った。

「どうやらわしも客として認められたらしい」

寛治はニンマリと笑い、いやな臭いの煙を吐き出した。その眼が胸もとに送られているのに気付き、千夏は片手をガウンの襟割りにやってそっぽを向いた。

「で、ご用件というのはなんなのですか。教師の私生活の監視ですか」

「そうツンツンするんじゃない。怒った顔はまるで観賞に耐えなくなる」呆れた顔つきの千夏を黙殺して老人はつづけた。「神聖な栄宮学園の伝統と気品を守っていくためにも、未熟な教師の管理は怠るわけにはいかない

が、まあ、今日は茶の一杯もださない非常識を責めたりはせんことにしよう」

「それは有り難いお言葉ですわ！」

ムカつく寛治の態度に千夏は眼が吊り上がっている。

「問題ははるかに深刻なことじゃ」と寛治は腕を組んだ。「あんたのクラスに横内まゆみという生徒がおるね？」

千夏の表情が厳しくなった。話はそれだったのか。しかしなぜこの老人が？

「いますけどそれが何か？」千夏は慎重に言葉を選んで言った。

「わしは憂いておるんじゃよ。昨今の子供たちにおける教育への不信感を」

「それで？」

「そのまゆみという生徒も、まったく担任のあんたを信頼していないそうじゃないか」

「どうしてそういう話をご存じなのですか。あなたはたしかに以前は栄宮の教師だったわけですけど、すでに退職しているわけですから、こういった件については部外者であるはずですよ」

「そんな小役人みたいな屁理屈を言ってはいかん。そういう融通のないことだから、学校はどんどん硬直していくのだ」

（あんたの体罰主義のほうがよっぽど生徒を頑なにさ

せるんじゃないの)

千夏は心中そう毒突いていたが、言葉にはしなかった。あまりにカンカンガクガクやると、喋らなくていいことまで口走る危険性がある。自分の短気な性格をよく理解している吉沢先生である。

「横内まゆみのお話でしたら、本人のプライバシーもあり、あまりお相手はできませんわよ」

一線を画す千夏。

「一人の前途ある若者の将来が、一人の無能な教師によってズタズタにされてしまうと思えば、部内者も部外者もなく、大人の責任として語り合わねばならんのではないかね」

「私が無能な教師と言いたいのですね」

「あんたが素行記録を警察へ流したんじゃない」

「どなたから聞いたのかわかりませんが、それはまったくの事実無根です」

千夏はキッパリと言いきった。

「問題なのは事実なんかじゃない！」

ひととき大きな声で言い、寛治はテーブルをドンと叩いた。

「生徒がどう思っているかじゃ。横内まゆみはあんただと信じている。そう思わせる落ち度があんたにあったということをわしは言っておるんじゃない！」

一喝され、吉沢先生は座り直さざるをえない。痛い

ころをつかれたのである。

「それは……その通りですが……しかしどんなに心から話をしても聞いてくれません。もちろんその努力は今もつづけていますが……」

「ほらみなさい」

寛治老人は千夏の暗い表情に追い打ちをかけるように叩き込む。

「なんだかんだと偉そうな口をきくくせに、肝心な、生徒との信頼関係ひとつ、構築できていないではないか。先輩として嘆かわしいかぎりだ。吉沢君！ あんた、反省しておるのかね？」

千夏の前髪の垂れた額に生汗が光りはじめている。化粧っ気のない男好きする顔は頬を紅潮させている。それにしても膚の綺麗な女である。小鼻の荒れもほとんど目立たないのだから。真剣に思い詰めている瞳はやや細く切れ長であり、キッと結んだ朱唇も薄めで素敵な形をしていた。

そんな美貌を寛治老人は勝ち誇ったように見つめていた。

「その顔からするとずいぶん悩んではいるようだな」

この件にはたしかに裏があるはずなのだ、と千夏は喉元まで出掛かった言葉を飲み込んだ。宮城寛治の硬骨ぶりにあてられて、うっかりしたことは言えない。なんとんでも彼は宮城一族のれっきとした一員なのである。

それに山川教頭の腰巾着である宮城靖の叔父ではないか。千夏が事件の首謀者と睨んでいる人間に近い筋の人物なのだ。ここは肩に振りおろされる喝いれの木刀を、忍んで受けるしかないのだ。

「反省しておるんじゃな」

「反省しております……」

千夏は従順に頷いた。

ではと、寛治は椅子を千夏の横へ移動させて、横顔を覗き込むような位置にきてしまう。まったく身軽なやり方だったので、千夏は声を上げるのも忘れていた。鼻の頭が触れ合うほどの間近で、濁った男の眼に射すくめられる。すると、何か自分が悪いことをした人間のような気分になってくるから不思議だ。咎め立てのタイミングを逸すると一連の不作法も追認されて、千夏はますますがっくりと顔を伏せ、寛治老人はますます増長していくようだった。

「——では、最近の学校側の横内まゆみに対する不穏な動きについて、思うところを言ってみなさい」

ヤニ臭い息を吹き掛けながら、宮城寛治は吉沢先生の形のいい耳たぶに生えているうぶ毛を観察する。

「と、申しますと……」

なんだか、言葉遣いまで改まってしまった。

「トボケんでいい。わしは栄宮学園のことなら何でも知っておるんだから。ホッホッホ」

黄色く変色した入れ歯をみせつけられると、千夏のほうが羞恥心を覚えて慌てて眼をそらせた。

「学校側が横内まゆみを退学処分にしようと躍起になっていることはハッキリしておる。担任のあんたが知らぬはずもなかるう」

「存じております」

「とくに横内には責任を痛感しておるあんたのことだから、見捨てるような真似はしないだろうな」

「当然ですわ。今回の学校側の対応には納得できません」

「ほほう、どんなところがじゃ」

「それはですね。つまり――」

千夏はそこではっと口をつぐんだ。駄目駄目、すぐに挑発される性格なんだわ、私……。

立ち上がり、「あの、お茶を入れますから」とひと呼吸入れるべくキッチンへ向おうとする。だが、老人は彼女の腕を掴んだ。

「いいから座りなさい」

さして力を用いなくとも、小柄な吉沢先生はやすやすと引き戻され、ドンとお尻を椅子に落とした。寛治はさらに馴々しく彼女の肩に腕を置き、けっこうな力で叩くのである。

「人が話しているときに座を外すとは無礼な態度じゃぞ」

「ご、ごめんなさい……」

自分のほうがよっぽど無礼なのに、と千夏は思ったが、つい頭を下げてしまった。そうせざるをえないような、逆らいがたい雰囲気は寛治にはある。教職生活半世紀の自信が生み出すものなのだろうか。

「よしよし、そうしょげることはない」

とうとう寛治は千夏の頭を撫で付けた。

「で、やはり学校側の対応はおかしいと思うのだな」

「ええ、そうですね。今頃になって横内さんを退学にするなんて。そのつもりがあるなら、去年、彼女が荒れだしたときにするのが筋のはずです」

「なるほど。お前が素行記録を流出させた時にだな」

「それはだから違うって……」

「ムキになるな。わしはあんたの味方じゃ」寛治は悠々と二本目の煙草に火をつけた。「しかしまたどうして、学校側は急に態度を硬化させたのじゃろう」

「あのォ、ハッキリさせておきたいのですが……」

千夏は恐る恐る言った。なぜこうも遠慮しなければいけないのか。

「寛治さんは、いえ、寛治先生はそれほど栄宮学園を愛しておられるのに、どうして私の味方なんかに……」

「バカモン！」

寛治の表情がみるみる険しくなり、一喝した。

「わしをなんだとっておるんだっ。昔の職場にたか

って、甘い汁を吸おうなどと日参しているダニだと言いたいのか！」

寛治の拳が千夏の頭のとっぺんにゴツンと落ちた。他人に殴られた経験などほとんどないので、さほど痛くはないのにそれだけで頭に血が昇り、顔から火が噴いた。しかし寛治にかかると、怒られて当然のことを自分が口走ったのでは、とそういう思いが最初にこみあげてくるのである。情けないやら口惜しいやら、千夏は鼻の奥がツーンと熱くなってくるのを感じた。

「わしはな」寛治は突如声音を優しくしてつぶけた。

「女々しい料簡の男ではないぞ。わしにとって学校とは教師ではなく生徒なんじゃ。お前は靖やその他の宮城の家の人間との繋がりを言いたいんじゃないろうが、神かけて、情実に流されているのではない。もう一度いおう、わしにとって学校とは教師ではなく生徒。わしにとって学校とは教育ではなく人間なのじゃよ」

「……恐れ入りました……」

深々と頭を下げる千夏。いつのまにか、お前、呼ばわりされているのにも気付いていない様子である。

「わかってくれればそれでいいんじゃない。そもそもが未熟な人間なんだから、ひとつひとつ賢くなっていけばいい。ここは横内まゆみという、一個の若者のためによかれと思う行動をする。それこそが栄宮学園を真に愛する者の務めであろう」

寛治はフフフと不気味に笑い、人差し指で千夏の額をつついた。ゾツとするような行為だが、おぞましさは消えている。こんなにあっさり武装解除されるなんて、私はいったいどうしたのだろうか。

「その横内を守るのがわしのみるところ、どうやらお前しかいないと考えれば、矢も盾もたまらずこうしてわざわざ赴いてきているのだ。一族の人間が学校側に多いということは逆に影響力も行使できるということじゃ。つまらぬ意地をもたずに、わしを利用すればいいのだ。自分のためではなく横内まゆみのために、今、何をなすべきなのか、を最優先にして行動すべきじゃろうが。違うか？　ン？」

「まったく、おうせのとおりですわ」

「そうか。わかってくれるか。それではとりあえず、茶を入れる。若い女子にあわせて、つい喋りすぎたわ。少々、喉が渴いたぞ」

「ハ、ハイ……」千夏はキッチンへ立ち上がった。

ヤカンを火にかけながら、千夏は考えた。たしかに寛治を煙たがっているのは生徒や千夏ばかりではなく、山川教頭も、甥にあたる宮城靖も、そうなのである。靖の口からは一度ならず、寛治の悪口を聞いたことがあった。冗談のようなものかと思っていたが、こうして寛治と腰を据えて話してみると、彼らが嫌うのもわかるような気がする。敵にまわせば厄介だが、味方につければこ

れほど頼りになるものはいまい。まだもろ手を挙げてとはいかないが、しばらく付き合ってみる価値はありそうだ。茶の一杯くらい我慢しよう。彼の言うとおりに、横内まゆみの将来が最優先なのだから。

千夏が茶碗に茶を満たして盆にのせ、リビングに戻ってみると、寛治の姿がみえなかった。トイレへでもいっているのかと思ったが、どうも寝室からゴソゴソと音が聴こえてくるのだ。驚いて駆け付けてみると、まさに寛治が腕組みをして、千夏がついさっきまで身を横たえていたベッドをじっと見下ろしているではないか。

「な、何をしているのですっ」千夏は真っ赤になって叫んだ。

「敵に対する前にまず味方のことをよく知っておかねばならぬ。女の性格は寝間を観察するとよくわかるのだ。ずいぶんズボラな性質のようじゃな。下履きが床に落ちておる」

「早くでてください！」

寛治の腕を掴み、ようやくリビングに連れ戻す。

「寝るときには丸裸か？ 一人暮らしの女としては、ちと不用心すぎはしないか。教育上もあまりいいとは思えんぞ」

寛治はしゃあしゃあと喋ってのけ、皺だらけの口先を伸ばして茶を啜った。彼の視線がガウンを通して素肌に突き刺さってくるような錯覚にとらわれる。やはり味方

になど、してはいけないのだろうか。

「これは男が女にする忠告ではないぞ。爺いが孫にする説教だ。ホッホッホ」

快活に嗤う寛治の屈託のない笑顔を見ていると、それもそうなのかと思ってしまう。不思議に憎めない人物だ。しかしファシストにこういった人種が多いのも事実である。

「さて、話はどこまでいったかな。そうそう学校側には不審を抱いているというところじゃったな。その根拠とはいったいなんじゃ」

「……明白な証拠があるわけではありませんが……」

千夏はしぶしぶ語りだした。

「どうも例の素行記録流出事件は、山川伸弘教頭の差し金ではなかったかと思うのです。いや、私はそう確信しています」

寛治の眼が光る。容疑者への刑事の視線だ。

「ふむ、仮にお前の言うとおりとして、なぜそんなことをする必要があったのじゃ。山川に何の利益がある？」

「調べてみると、かつて同種の事件があったのです。とくに、私が赴任してくる以前は顕著でした。一年に何人かの生徒たちにあらぬ非行の疑いがもちあがり、退学させられ、その後の消息がつかめない。風俗関係の店で働かされているという噂も……」

「噂か。証拠はないのか。たとえばその中の一人の証言があるとか」

「ありませんわ。もしあったのならすぐに警察へ飛び込んでます」

千夏は嘘を言った。実はそのものズバリの証言がテープに吹き込まれているのだ。しっかり山川教頭一派の関与を肯定する内容である。ただしこれだけではなんとも弱い。シラを切られればそれまでである。千夏はこれを、職員会議を攪乱し時間稼ぎする材料に使うつもりなのである。そのためにはじゅうぶんだろう。周到な計画であるが悲しいかな、帝国陸軍のスパイ養成所にいたとも噂される宮城寛治の眼力を誤魔化すほどの演技力は彼女にはないのだった。甘噛みしてやりたい素敵な耳たぶが知らぬ間に紅生姜のように紅潮しているのである。

「そうか。物的証拠はなしか。それはちと辛いものがあるな」と寛治は腕組み。

「寛治先生のほうで彼らから情報を引き出すことはできませんか」

「できぬ相談ではないが、なにしろ明日の話では時間がなさすぎる。しかし山川の奴め。そうだとするととんでもないワルじゃな。神聖な栄宮学園の教師が女衞のような真似をしておってからに」

寛治は憤り、苦虫を噛み潰したような顔になっている。

「しかしな。わしはお前を少し見直したぞ」老人は千夏の肩を叩いた。「お前がそこまで横内まゆみのことに真剣になっていようとは知らなんだ。微力ながらいろいろと骨は折っているのだな」

微力は余計だと千夏は思ったが、寛治がじっと見つめるので、思わず赫くなった。

「こうしてみると、面構えもそう捨てたものじゃない。なかなか見所があるやもしれぬ。どうじゃな。この件とは別に、わしのところで少し修業してみんか」

「は？ 寛治先生のところと申しますと……」

千夏は彼の家で栄宮学園の柔道部の男子女子が合宿しているのは知っている。なにしろ宮城靖が顧問をしているくらいだから、暴力団予備軍みたいな連中の溜り場である。といっても校則を破って不良化するのではなく、むしろそれを強化するための一種の親衛隊といってい。そこで修業とはいったい……。

「勘違いするでない。わしのところで柔道部が合宿しているが、あれはほとんど靖が受け持っているのだ。わしがやっているのは教師相手の私塾じゃよ。お前のような見所はあるが、いまひとつ伸び悩んでいる若手の教師を集めて、わしの半世紀に及ぶ聖職者としての蓄積を伝授しておるわけだ。今も数人が泊まり込んで励んでおるぞ。むろん自宅から通ってもかまわない」

「それはありがたいお言葉ですが、今は横内まゆみの

一件でかかりきりになっておりますものですから」

千夏は丁重に断った。

「ま、考えておけばいい」

寛治はそう言うといとまを告げた。

「肝心なのは忍耐じゃぞ。生徒の人生が自分の肩にかかっていると思えば、どんなにことにも耐えられる。そう思うのが教師というものじゃ。そしてこれだ——」

寛治は自らの手でかけた壁の掛け軸を指差した。

「言ってみなさい」

「はあ……誠心誠意……」

「声が小さいっ。もっと大きな声で！」ハツパをかける寛治老人。

「誠心誠意！」

「よろしい。わしもできるかぎりの手を打って側面支援を試みよう。しかしあくまで手助けじゃ。すべてはお前の根性しだい。期待しておるぞ！」

老人は宅急便の帽子をしっかりとかぶり、軽快な足取りで出ていった。

千夏はそれを呆然と見送っていたが、さて彼を信用しているものかどうか、まだ考えあぐねているのだった。たしかなのは日曜の朝を台無しにされたことと、掛け軸を置いていったことと、彼には重要な話は結局しなかったことだけである。いや、もうひとつ、寛治老人のズボンの尻のポケットに千夏の寝室のクローゼットから盗み

だしたブルーのパンティがねじ込まれている衝撃の事実もあったのだが、それは千夏の合い知らぬ話であった。

「お前たち、すべてはあの小娘に見抜かれておるぞ！」

宮城寛治は自宅へ戻ると、待ちかねていた山川、鈴木、それに甥の靖に向かって怒鳴りつけた。

「や、やはりそうでしたか」山川は平伏しながら、困惑の表情を浮かべる。

寛治は和服に着替え、青畳のうえに胡坐をかいた。十畳の日本間は森閑とした庭に縁側を張りだし、柔らかい木漏れ日とすずやかな風を取り込んで爽やかであった。ときおり遠くから若い男女の気合いの声が届いてくるのは、柔道部の練習なのであろう。

床の間にいけられた花が見事な色彩を添えている。

「それどころか、確たる証拠を掴んでいるのは必定。あやつめ、トボケおって話さなかったが、顔に書いてあったわ。たぶんテープがあるんだろう」

「テープ、と申しますと？」

寛治が啜えた煙草に鈴木が慌てて火をつける。

「おおかた、ソープラントでもシラミ潰しに嗅ぎ回って、昔の学園の中退者を探しだしたんじゃ。当然、お前たちの名前も入っておると思わねばならん」

「そこまでやっているとは、考えもしませんでした。やはり寛治先生にお頼みして正解でしたな」

山川は平身低頭、米つきバツタ状態だ。

「愚か者め！」その教頭の禿げ頭をぴしゃりと叩く老人。「欲の皮を突っ張って、横内まゆみをさっさと退学にしないからこんなことになる。いや、お前たちなどどうなってもいいが、神聖な栄宮の名に傷がつきでもしてみろ。先代になんとお詫びをいっていいか。宮城の家にも火の粉が振りかかるではないか。教師の代わりなどいくらでもおるが、一度地に落ちた名声は二度と戻ってはこんのだぞ」

寛治はそう吐き捨てる、怒りを沈めるように煙草を深く吸い込んだ。もちろんこの硬骨漢を装った老人も、山川らの内職については最初から片棒を担いでいる。なにしろ合宿場や教師相手の私塾には経費がかかる。寄付金もろくに払えないような下級家庭の女子生徒を処分してそれなりに栄宮学園に、そして宮城一族の一員たる自分に、貢献させるのは当然だと思っているのだ。寛治としても今それを断たれるのは、ちとつまらないのである。

「あのアマゾネスのアパートに堂々と乗り込んで行って、それだけのことがわかるんだから、たいしたものですよ」

とは柔道着姿の靖だ。一汗かいてきたらしい。

「わしの血を引いているくせにお前が少しも力にならんから、苦勞するんじゃ。お前も少しはあの女教師を見

習って豆に働いたらどうなんだ」

甥っ子の腑甲斐なさに苛々を隠さない。

「わかってますって」

この叔父の前ではからっきし子供扱いなのが癢にさわる。

「お前たちをなじっていてもはじまらん。いかにしてこの未曾有の窮地を脱するか、それが問題じゃ」

三人はその通りだと、犬のように頷いた。

「最も考えねばならんのは事後処理だ」

「事後処理？」

「職員会議を丸め込むことなど、簡単じゃろ。吉沢千夏が一人で吠えたててみたところで、数の力には逆らえんのじゃからのう。吉沢本人もそれはじゅうぶんにわかっているはずだ。お前たちよりも頭は切れるからな」寛治はホッホッホと嘲笑した。「あやつめがゲリラ戦を展開しようとしているのは、ほぼ間違いあるまい。時間を稼いで、その間に無関心層を切り崩そうというのじゃろ。あるいはマスコミに働きかけるという手もある。そうなればネズミ一匹とはいえ、面倒なことになる。だからどうやって横内まゆみを退学処分にしたあと、吉沢の口を封じるかがポイントだな」

「クビにしてしまえばいい」と、靖は言った。

「たわけ！ そんなことをすれば、学校が吉沢の主張を認めたと世間は思うではないか。少しは物を考える」

寛治に一喝された靖はすっかり意気消沈してしまう。

「千夏が自発的にやめてくれれば一番いいわけだ」

鈴木学年主任は思慮ぶかげに言った。吉沢先生のことを千夏と呼び捨てにするのは彼らの間ですっかり定着しているようだ。

「しかしねえ、あの千夏が辞職なんて、するはずもないですよ」

山川は弱気である。

「そうかな」寛治老人は不敵な笑みを漏らす。「みたところ、吉沢はねっからの教師。生徒が好きで好きでたまらぬというタイプではないかな。どうじゃ？」

「それはもうおっしゃる通りで。恋人よりもこの職業を愛しているといっていいいでしょう。だからこそ辞職などは」

「その恋人よりも好きなことが、栄宮学園にいる以上、できなくなると考えた場合、身の振り方に思いを馳せるのでは」

山川が急に思いついたように顔をあげた。

「教鞭を取り上げてしまう……そうか、配置転換という手はあるな」

「配置転換？」鈴木と靖は異口同音で叫んだ。

「担任を外し、すっかり仕事を干してしまうのだ」

「横内まゆみの件で引責させるわけですね。謹慎という名目で」

山川の声が弾んできた。

「なるほど中間派に対する見せしめにもなる。いっそ職員室から彼女の机もなくしてしましましょう」

鈴木の顔もにわかには明るくなった。靖は、体育教官室にある物置を改造して特別室を作り、そこに毎日通わせるようにしたらどうかと提案した。

「そいつはなかなかいい。一日中、座禅を組ませてやるか」

「ヒヒヒ、あそこはサウナのようになりますからね。脂汗を絞り取るには最適ですよ」

「ビデオカメラを忍ばせて千夏の顔を隠し撮りするってのも可能じゃないか」

ようやくにっくき吉沢千夏を成敗するメドがたってきて、三人は浮かれ気味である。

「さて、問題は吉沢がもっているだろうと思われる証拠品だが、それについてはわしにいい考えがある……」

寛治が声をひそめたので、子分どもは頭を寄せあい、聞き入った。

吉沢先生のは小判型

連休の最終日である月曜日の午後六時半から、栄宮学園の緊急職員会議が始まる予定である。吉沢千夏にとっ

ては決戦のときがきたという感じだ。鏡台の前に座り、鏡に映っている自分の顔を眺めると、そんな決意が眉間に滲んでいるような気がした。頭髪に櫛を通し、梳きあげ、顔を半分も隠すその豊富な量の中からも、やや細い優しそうな眼が緊張に輝いているようだった。ベージュのスリッパ姿だから、柔らかい女性的な線の肩や、鎖骨が美しく浮き出た胸もとが鮮やかに露出し、とかされる黒髪が垂れかかる。

千夏はまるで果たし合いの場へ赴く若武者のように、それを束ね、ゴムでまとめた。キリリとした表情があらわとなり、パッと鏡の中が華やいた。前髪を整えると、二十六歳の年齢よりも若く見えてくる。化粧はほとんどしないのだが、腺病質に見えない程度に軽く頬紅とルージュをひく。淡いアクセントをつけるだけで、千夏的美貌はいっそう映えるのであった。

立ち上がり、下着姿でクローゼットからブラウスをとる。爪先立ちの格好で、白い足がスリッパの裾から大きく露出した。ムチムチしたふくらはぎの筋肉が突っ張り、太腿も弾力をみなぎらせている。腰の丸みはかすかにパンティのラインを浮き立たせながら、官能的に揺れている。

千夏が手にしたのはいちばん気に入っている薄いブルーのブラウスだ。半袖に腕を通し、後ろ髪を跳ねあげ、胸前のボタンをとめていく。可愛らしい小さめの胸は目

立たないが、ウエストはしっかりくびれているので、スラックスのベルトをしめるとプロポーションはなかなかのものに思える。もう一度、髪をセットし、鏡で点検し、寝室の明かりを消した。

資料の入った鞆をもって決然と部屋を出る。アパートの外はそろそろ暗くなりかけていた。ちらほら団地の窓に灯がつきはじめている。千夏のアパートから学園まで徒歩約二十分。途中、駅前の商店街を迂回して墓地に隣接したお寺の境内を横切れば、五分ほど短縮できる。いつものコースだ。ひっそり閑とした寂しさが、千夏は好きでその道を選んでいる。とくに痴漢の噂も聴かないし、大声をだせば民家に届くほどの裏通りなのだから何も心配はいらない。境内にあるケヤキ並木の緑を見ると、ほっとする気分になれるのがいいのだ。

三連休も終わりに近付くと、子供たちも遊び疲れたのか、ほとんど姿が見えなかった。墓地の隣の小公園は彼らの格好の冒険の場所になっている。千夏は境内を突っ切り、墓地を右手にみながら、歩みを早めていた。横内まゆみをなんとしても守ってやらねばと、悲壮な決意が彼女を学校に向わせている。おそらく今日の職員会議は紛糾して夜遅くにまで延長していくのであろう。覚悟はできている。

「オバサン！」と愛らしい声が千夏の背を呼び止めた。振り返ると小学校低学年、いや幼稚園児ほどの女の

子が指を咥えて立っていた。

「どうしたの？」

千夏は微笑みながら彼女の目線まで腰を屈め、クリクリした円らな瞳を見つめた。

「あのね、ボールがねえ、お家の下に入っちゃったの。取れないの」

そこまで一気に喋ると半ベソ状態になった。

「あそこの公園ね」

千夏は女の子の頭を撫でながら尋ねた。こっくりと頷く彼女の手を引いて、道を引き返す。小公園に戻り、見回すと、その隅にプレハブの物置場が立っていた。どうやら公園とは関係なく近くの建設工事のための簡易トイレらしい。

（こんなところに造って違法じゃないのかしら）

トイレの底にはブロックが敷かれてい、一段高くなっている。そこにできた隙間にボールが転がり込んだらしい。

「どれどれ——オバサンがとってあげよう」

膝をついて這いつくばって覗くと、たしかに小さな赤いゴムボールが見える。片手を差し入れ、探るがなかなか届かない。身体を横に向け、肩全体を突っ込んで顔を背けながら手探りだ。

「よし、よーし。取ったっ」

千夏はそう叫び、手を引きぬこうとした。

その時である。それまで見えていた子供の人形のような二本の足が、黒い地下足袋に変わっていたのだ。

「?……」千夏はその持ち主の顔を見上げようとした。しかしそうする前に顔に何かスプレーのようなものをシュッと吹き掛けられた。思わず吸い込むとあっという間に意識が遠くなった。

「さ、そっちの茂みに連れ込もうぜ」

千夏は知らなかったが男はもう一人いた。ラクダのシャツに腹巻、そしてニッカボッカと、いまどき珍しい典型的な土木作業員の風体の二人は気絶した女教師を引きずりだし、前後から抱えあげると公園と墓地の間にある茂みに連れ込んだ。むろん彼らは宮城寛治の密命を受けた男たちであり、証拠品を奪取するのが目的であった。

彼らはまず千夏の鞆を巻き散らかし、それと思われるカセットテープを確保した。物取りの犯行にみせるために鞆ごと頂くことになる。

さらに彼女のブラウスのボタンを外していった。

「自慢じゃないが——」と一人がいった。「女教師のオッパイを拝むのはこれが初めてだぜ」

「そうかい。俺は一度あるがな」ともう一人が答える。「修学旅行のとき、風呂場で覗いたんだ。もっとも五十のババアだったが」

二人は乾いた嗤いを響かせつつ、瞳を爛々とさせてブラウスを剥ぎ取った。

「ケツ、地味な下着だぜ」

「かえってムラムラしてきやがった」

ベージュのスリップがあらわになると、視線はいやでも胸もとに集中する。

「とんだ貧パイじゃねえか」

「贅沢いうんじゃないよ。女教師女教師……」

呪文のように唱えながらスラックスの腰のチャックを引きおろした。

「うん。ケツのほうはけっこうな巨きさだ」

スラックスを太腿の半ばまでさげる。スリップの肩紐を滑らせ、ブラジャーをあらわにする。白い半裸体が夕闇が優勢になりはじめた木立にボウツと浮かんでいる感じ。

「ヒヒヒ、可愛い臍、窪ませやがって」

一人はしきりに千夏の下腹の中央をつついていてる。

「ブラジャーは外していいっていったよな？」

「そう。痴漢にあったことを本人がわかる程度に脱がせるんだ」

男たちは小柄な千夏を軽々と引っ繰り返し、ブラのホックを外した。陶器を思わせる白肌が美しい背筋を艶かしく窪ませている。どっこらしょ、と仰向けに戻し、弛んだブラジャーを一気に耑り取る。xxのような乳ぶさがかすかに弾みながら現われた。ふっくらとした盛り上がりはあるものの、ボリューム感は少なく、寝ていても起

きていてもほとんど変化はみられないだろう。ただし、メラニン色素の濃い茶ずんだ小さな乳輪の真ん中の、乳首は陥没知らずでツンと上向きであった。

「これはこれで、可愛いじゃないの」

「そうそう。AV女優じゃないんだから」

そういいながら、男たちはヨダレを垂らしそうな表情になっている。

「……うう……ンン……」

千夏が鼻息を乱し、覚醒しそうになっている。男たちは慌ててハンカチにクロロホルムを染み込ませ、それを彼女の鼻と口にあてがった。男たちの腕のなかで、千夏は無意識に藻掻いたが、再び深い眠りのなかへ落ちていった。

「さ、早いところ、ズラかるう。つまらん助平心を起こして捕まったら馬鹿くせえ」

「——ちよっところを挿んでいかせてくれよ」

一人は未練がましくパンティの縁のゴムをつまむ。

「どんな女でもこの瞬間は神聖な胸の高鳴を覚えるな」

男は腰骨の出っ張りからパンティをずりおろした。下腹部の白いふくらみに疎らな恥毛が覗けだすと、軽口もすっかり消えて鼻息ばかりが荒くなってきた。女教師の生え具合はムンと密集の濃い小判型で、けっこう淫乱の層をしている。雪白の肌をあざむくように黒々と光り、

縮れの少ない上質の毛並みであった。

さすがに襲撃者たちにはその毛並みを掻き分け、媚肉の構造を吟味する時間の余裕はなかった。ふっくらとした毛饅頭をパンティに隠し、彼らは大事そうに鞆を抱えて走り去った。

吉沢先生が昏睡から目覚めたのはもう深夜に近かった。頭はガンガンするが着衣の乱れから自分がどんな目に遭遇したか、想像はつき、すぐに警察へ駆け込んだ。警察では簡単な調書を取られ、被害届けの提出をすすめられた。しかし彼らの対応は一様に官吏的でどこまで積極的に動いてくれるのか、わからなかった。とにかくこの程度の軽微な犯罪は日常茶飯事であり、彼らの関心を強く引くものでないのはたしかのようだ。

すべてが終って、自宅のアパートに戻ったときには明け方近くで、千夏はぐったりと疲労していた。肉体的な疲れはもとより、精神的なダメージははかりしれない。大切な生徒の将来を決める会議に出席できなかったという後悔は彼女をとことん責め立てた。不測の事態とはいえ、現実には現実である。山川教頭たちは職員会議のやり直しに応じるだろうか。その期待はまったくくないに等しいのは、千夏にはよくわかっている。彼らはきっと、唯一の横内まゆみ擁護派の欠席をいいことに、議論もほとんどせずに、さっさと彼女の退学処分を決定したと思われる。それを覆すのは不可能だろう。

千夏はバスルームでシャワーを浴びながら唇を噛み締めるしかなかった。計画ではショッキングなテープの公開で、職員会議を攪乱し、時間を稼いで味方を増やしていく狙いだったのだが、肝心のテープは奪われた鞆のなかである。警察によるとこういった強盗の場合、金目の物でない盗品はすぐに処分されるのが常であり、犯人が捕まったとしても手元に戻る期待は抱かないほうがいいらしい。

山川派の犯罪を証明するただひとつの証拠品は闇に葬られてしまった。彼らは糾弾されることなく、これからものうのうと栄宮学園に跋扈しつづけるのである。

そして彼らは事あるごとに手を焼かせてきた反抗分子を血祭りにあげるきっかけさえ、掴んだのである。

翌朝早く、千夏の枕元の電話が激しく鳴り響いた。山川からであった。

「吉沢君。昨日はどうしたんだね。無断で会議をサボるとは君らしくもない。君が召集させたような会議じゃないか。言い出しっぺがこないんじゃ、お話にならないだろう」

きつい口調で山川は千夏を追及した。千夏は事情を説明する。

「なんだって！ レイプされたの？ 吉沢先生？」
頓狂な声が受話器の向こうから聴こえてくる。

「違います。レイプではありませんわ」

千夏は鼻白みながら何度も詳細を繰り返さねばならなかった。

「着衣の乱れって、下着が脱がされていたんだね」

「……ええ……」

「ブラジャーを取られたのか。パンティはどうした？」

「それは意味のないことです。強盗にあって、気を失っている間に悪戯された、それだけですわ」

キッと言い返す千夏。

「上司として部下の健康状態に注意を払うのは当然だよ」

「教頭。それより会議はどうなったんです？ 横内まゆみの処遇は？」

山川は慌てて話した。

「そうそう、それだよ。横内まゆみは退学処分に決まったのだが」

やっぱり……千夏の失意は大きかった。ベットにそのまま座り込んだ。腫れぼったい寝不足の顔がますます暗くなっていく。

「しかし問題はそれから後なんだよ」

「はあ？」

「処分の決定を受けて、私と学年主任の鈴木先生が横内の家へ報告にいったんだ。本来は吉沢先生にも当然一緒にいってもらはずだったんだがね——」

チクチクと千夏の罪悪感を刺激してくる山川だ。

「それで横内に報せたら、あいつ、興奮しおってね。

『吉沢先生はどうした？ 吉沢先生はなぜこない？』と逆上して叫びはじめたんだ。口では反発していても、まだ心のどこかで吉沢先生を信頼していたんだねえ。可愛いじゃないか。あんなに色気があっても……いやいや大人びていても子供なんだよ。吉沢先生、あんた、横内まゆみに、絶対に自分が守ってやるといったそうじゃないか。駄目なんだよ。そういう安請け合いは。子供たちの期待を裏切ったときのショックも考えないと」

たしかに千夏はこの職員会議にあたって、まゆみを勇気づけるように何度も励ましている。しかし山川にいわれるのは腹立たしい。子供の期待を裏切っているのは自分たちではないか。千夏が反論しようとする前に、山川は話をつづけた。

「で、逆上した横内まゆみはそのまま家を飛びだしていったんだ」

「飛び出した？」

「うむ、それっきり、いまだに家にも帰らず、連絡なしだ。吉沢先生のところへ行ってるかもしれないと思ったんだが、そうではないのか……」

千夏は気が遠くなる思いであった。担任のクラスの生徒が家出をするなど、教師としてこれほどショッキングな話はないのである。

「すぐに学校へ行きますわ。警察へは届けたんですの？」

「いやまだだ。母親が少し様子を見たいというのでね。とにかく吉沢先生もお疲れだろうけど、さっそく心当たりを探してほしいんだよ」

必死の捜索にもかかわらず、横内まゆみの行方は一週間たってもようとしてわからなかった。不思議なのはこの期に及んでも、まゆみの家族は家出人の届けをだしていないという事実であった。千夏がいくら、自殺の可能性だってないとはいえないのだから、一刻も早く警察の力を借りたほうが良いと忠告しても、母親は錯乱状態で話にならず、自称父親代わりの親戚の男性は、まったく不良のまゆみに同情しておらず、ヌケヌケと見つからないならそれでもいい、と公言してはばからない。いい厄介払いができたと、今にも言いそうな雰囲気さえある。むろん、学校としてすでに退学している元生徒の行方にそうそう関わっているわけにもいかないとの山川の意向で、千夏以外の教師の捜索活動も打ち切られた。ただ一人、千夏だけが放課後、あてもなく街を歩き、まゆみの姿を追い求めている。

その吉沢先生の立場も微妙なものになっていた。職員室では、理由はどうあれ千夏のクラスから退学者が出た事実でもって、彼女の責任を問う空気が充満している。それは影に日向に山川らが焚き付けている節があった

が、千夏はまゆみの件で頭が一杯で気が付くどころではなかった。

さらにそのまゆみへの一心不乱な取り組みぶりが、千夏のクラスの他の生徒の父母たちから非難を買いはじめている。不良にばかり、かかり切りになって、ちゃんと授業料を払っている真面目な生徒に皺寄せが来ているのはどういうわけか？ 親馬鹿、教育ママたちはこういった損得勘定には敏感なのである。

そして、生徒たちの中には、吉沢先生がレイプされたらしいと、噂が飛びかいはじめていた。千夏が数学の授業のために教室を訪れると、男子生徒の淫靡な視線と女子生徒の潔癖な非難がましい視線とが、やや瘦れた表情の彼女の顔へ突き刺すように集中するのである。これでは授業に集中するのは不可能であった。

千夏はある日の放課後、山川と鈴木に呼び出された。

「教頭先生、明日にしてもらえませんか。これから歌舞伎町のほうへ横内まゆみを捜しに——」

「まあまあ吉沢先生、お掛けになって。その件を含めているいろと整理しておいたほうが良いと思うのですよ」

山川はいつになくにこやかな表情をしている。

「吉沢先生、だいぶお疲れのようじゃないですか。どうです、その後、身体の調子は」

鈴木は訊問官のように千夏の前に座って煙草に火をつ

ける。

「毎日夜遅くまでいろいろと歩いているんでしょう」

「大丈夫ですわ。身体は頑丈にできてますから」

素っ気なく言う千夏。とにかくこの男たちと顔を突き合わせているだけで、不快な気分になってくる。鉄面皮な横っ面をひっぱたきたくなる。そしてそんな悪党どもを、なんともできない自分の弱さにただただ腹立たしかった。

「生徒たちは心配していますぞ。栄宮学園のマドンナにいつもの笑顔が見られないと。彼らは敏感ですからねえ」

山川は紺のTシャツのうえからジャケットを羽織った千夏の今日の服装をジロリと眺めた。

「何をおっしゃりたいんですか。ハッキリいってください」

「つまり、受験を前にした大事な時期ですからな。教師は心身ともに澆刺として彼らを勇気づけなければならないわけです」

鈴木も非難するようにいった。

「当然でしょう。担任が退学した不良娘にかかずにあって、自分たちをないがしろにしていると思えば、誰だって面白くない。白けてしまう。それ以上に最近では動揺をきたしている。まずいですよ。吉沢先生」

「私がいつどこに動揺を見せたというのです。生徒が

そういったのですか」

「まあまあ、そう喧嘩腰でものをいったら身も蓋もない。落ち着いて」

「ようするに、父兄が何か言ってきたんですね」

「ま、そういうことですな。しかしそれは仕方がないことですよ。吉沢先生が横内まゆみを愛している以上に、親は自分の子供が可愛いんですから。もし自分の子供が受験戦争において、他のクラスの生徒より不利になると思えば、なんでも言ってきますよ。それはただど当然でしょう。いまどき」

「進学よりも大事なことはある、と日頃から生徒には話してきたつもりです」

千夏の理想論を鈴木は露骨に嘲笑した。

「ありますよ。だけどシンナー吸ったり、かつあげしたり、売春するような不良との友情ではありませんよ」

「横内まゆみはそんな生徒ではありませんわっ。鈴木先生、今の言葉を撤回してください」

「わからないなあ。吉沢先生がなぜ横内まゆみに執着するのか……」

「教師としての当然の責務を行なっているだけですわ」

「夜中に歌舞伎町を歩き回ってポンビキに写真を見せて回るのが教師としての責務ですか」

鈴木はでっぷりと太った腹を突き出すようにいった。

「まあまあ学年主任も落ち着いて。しかし吉沢先生。少しやりすぎなのは明白でしょう。それは警察の仕事ですよ。教師は探偵じゃありません。素人が手がかりもなくうろろうしても、どうなるものでもない。あなたがこれから取り組まなければならないのは、第二、第三の横内まゆみを教え子からださないように努力することじゃないですか」

山川の言葉に、今度は千夏が失笑した。よくもまあ、いえたものだ。お前たちがまゆみをここまで追い込んだんじゃないか。

「それで？ どういう結論をおもちですか。それを聞かせて戴けませんか？ クビですか？」

「まさか。ただちょっと休養を取られたらほうがいいと思ひましてね。あんな不愉快な事件があったばかりだし、気分転換に旅行でもしてきたらいい。吉沢先生は働き詰めだったからなあ」山川はいった。「いや、ご心配なく。先生の穴を埋めるの大変だが、教師みんなで万全を期すつもりですよ」

「三年の途中で担任が変わったりしたら、それこそ生徒たちは動揺しますよ」

千夏は皮肉っぽく口を挟む。

「大丈夫だよ。女教師がレイプされた事件よりスキャンダラスな話なんて、そうありはしないからね」

鈴木はズバリと吐き捨てた。

「私はレイプされていませんよ」

千夏は噴辱を押し殺すようにいった。

「噂だよ。噂。事実なんかこの際関係ない。そういう噂が立つこと事態まずいんだ。授業への集中が削がれるんだから」

「うーん、まあ結果的にそういうことになるなあ。もちろんこれは吉沢先生にはまったく責任ないことだけど、現状は黙殺できないほどに深刻なのはたしかだ」

その噂も山川たちが運動部の生徒たちに漏らしたところから始まっている。千夏は頬をいくらか紅潮させた。山川がいった。

「そんなこんな、いろいろ含めて考えたときに、やはり冷却期間を置いたほうが良くはないだろうか。人の噂もなんとやらというし、ベストとはいえないまでもベターなんじゃないだろうかねえ」

「もし、私がお断わりしたらどうなるんですか？」

千夏は童顔の美貌をきつく引き締めて尋ねた。Tシャツの胸がかすかに起伏している。山川も鈴木もあの可愛らしいペチャパイが剥き出しにされた事実を知っているので、つい想像を逞しくさせる。ヤクザの武骨な指に掴み出された乳ぶさはどんなに痛々しかっただろう。

「——断ったらですかあ。その時はまあ、学校としても強権を発動しないわけにはいかんでしようなあ。それはしかし、吉沢先生の将来にとっても、学校への信頼の

面でも、よくないことでしょう。頭のいい吉沢先生が選択するとは思われませんが」

「残念ながら私は山川教頭のお見立てにはかなわない、鈍い頭脳しかもっていませんから、お申し出はお断りするほうがいいという結論ですわ」

千夏の決意に山川も鈴木も苦虫を噛みつぶした表情だ。千夏にとっては彼らの休養案を呑むことは事実上退職を承諾するのと同じである。学校を辞めてしまえば、事件がウヤムヤになるのは見えているし、教員たちはますます翼賛化するだろう。それこそ、第二、第三の横内まゆみを生み出す体制が整うのを意味するのだ。どんな仕打ちを受けたとしても栄宮学園の教師として残るかぎり、チャンスは必ずくる。少なくとも部外者になるよりは可能性があるだろう。

「お断わりしますわ」千夏はもう一度いった。「生徒たちを放り出して旅行になんていけるわけがありませんから」

「後悔しますよ。そんなに突っ張ったってどうなるというもんじゃないでしょうに」

鈴木は立ち上がりながらいった。

「恫喝はよく覚えておきますよ」

千夏も負けじと言い返す。

「せっかくこうして誠意を尽くしているのにわかってもらえないのは残念なことだ。あなたがここまで可愛げ

のない女だとは思わなかったですよ」

山川もムスツとして鈴木につづいた。

「吉沢先生、もうひとつ、新しい噂が広まりつつあるの、知ってる？」

首を横に振る千夏。

「あんたと横内まゆみができているっていう噂さ。つまりレスだな」

「いったい誰がそんなデマを流しているのでしょうか。鈴木主任はたぶん心当たりがあるんじゃないんですか」

「ふん。事実じゃないことを願っているよ」

捨て台詞を残して鈴木も山川も会議室を出ていった。一人とり残された吉沢先生の脳裏にはあの水泳大会の楽しい記憶がなぜか蘇ってきた。歓声。拍手。そして横内まゆみのキラキラとした笑顔。阿部麻衣も一緒に肩を抱き合って無邪気に笑っていた。青春とはああいう一瞬をいうのだろうと、常々千夏は考えていた。しかしいま自分の目の前に横たわっているのは不審と罵声と奸計と憎しみだけだ。それらが黒い塊となって、どっと千夏の前に吹き出している。負けるわけにはいかないと思うものの、闘志の底に寒々とした寂寥感があるのも事実だ。これからは私はどうなっていくのだろう……。千夏は暗鬱な気分になり打ちのめされるのだった。

次の日、千夏が学校にいとってみると、あるべきはずの自分の机が職員室のどこにも見当たらないのだった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

地獄のプリズナー

千夏は憤怒に顔面を紅潮させて開かずの扉を睨み付けた。それ以上大声あげてもなんの反応も返ってこないことはわかっていたが、黙っているような女ではないし、状況でもない。

「こんな人権侵害が赦されていると思っているのですか、あなたたちは！ 立派な監禁罪ですよ。開けてください。今すぐに！」

千夏は額から流れてくる汗を拭った。遠くで授業開始を告げるベルが鳴っているのが聴こえる。ザワザワと体育教師たちも教官室を出ていくようであった。

「うるさいんだよ」

人見の声が聞こえてきた。

「鍵が掛かっているわけじゃないから監禁罪なんて成立するものか。しかしこれはあくまで賃金支給の対象になる自習労働だからな。遊んでる人間に金を恵むわけにもいかん。つまり、一人は必ずここに残って監視監督を

するということだ。小便がしたくなったらそういえ。トイレに連れて行ってやるからな。さ、ちゃんと勉強しろ」

「人見先生、これじゃあんまり……」

しかし抗議の言葉は黙殺された。

千夏は深呼吸をして冷静になろうと努めた。改めて部屋を見回すと、まったく人間が入れられるべき部屋ではなかった。裸電球ひとつで窓すらない薄暗さ。黴臭い匂い。そしてジワジワと這いあがってくるような蒸し暑さは扉を締め切られると猛然と募ってくるようだった。

体育教官室の扉が開く気配がした。人見が挨拶をしている。山川が来たのだ。

「やあ、ご機嫌よう。吉沢先生——」

狡猾そうな笑みを浮かべながら山川教頭が反省室に入ってきた。

「どうですか。新しい職場のご感想は？」

「教頭先生、これはいったいどういうことなんですか。いくらなんでもひどすぎます。監獄じゃないですか、まるで」

「オーバーな。まあまあ、どうせ出ていく用事も吉沢先生にはないでしょう。だったらゆっくり自分と向き合ったらどうです。静かで落ち着ける雰囲気じゃありませんか。クックック」

「おしっこがしたくなりました。出してください」

「これはまた表現が直接的ですな。そういう野卑なところが誤解を生むのです。じゅうぶん反省してください。さもないと職場復帰は当分、ままなりませんよ。さて、そんな些細な問題よりもあなたにやってもらうことをいいにきたのですよ、私は」

トイレの話など一向に信じていないらしい。山川は机の抽斗を開けると千夏に指示した。中には大量のコピー用紙と封書が入っている。

「それはね。栄宮学園の卒業生の皆様に送る合同同窓会の告知の文章です。まあ、ざっと二万人はいますかな。その一人一人に送るわけですが、宛名書きと封書詰めがあなたのお仕事ですよ。名簿も入っているはずだから、それをみて正確に書いていってくださいね。なに、合同同窓会は秋ですからまだ時間はある。朝九時から夕方五時までかかりっきりになれば、一カ月程度でできるでしょう」

「私に事務職をやれというのですね」

「事務職を馬鹿にしてはいけませんぞ。これでも立派な仕事です。吉沢先生のような教師失格者に適当な仕事を見付けてあげたんですから、喜んでいただけなくては」

「こういう仕事なら別にここでなくともいいはずですよ。会議室とかそれこそ事務室とか」

「何をいっておるのです。そんなところ、生徒に見ら

れたらどうなります。昨日まで教壇に立っていた人気教師が理由はどうあれ袋張り浪人の姿を晒しては生徒に対するショックが大きすぎますよ。あなたが学園をおやめにならない以上、こういった飼い殺しのようなことになるのは避けられないのです」

山川はさすがに口がうまく、うかうかしていると納得させられてしまいそうだった。

「教頭先生、ひとつお聞きしてもいいですか」

鼻の頭の汗をハンカチでふきながら千夏はいった。

「五時の下校時間には解放していただけるのですね？」

「解放？ 何をいっているのです。勤務時間が終われば家へ帰るのは当然でしょう。あなたは囚人ではなく教師なんだから。ここに棲みつかれたら学園が困りますよ」

「では私が正門を出てその足で真っすぐ警察へ駆け込んだらどうするんですか？ あなたたちは捕まってしまうでしょう」

山川は再び笑い声をあげた。

「それは無理でしょうなあ」

「どういしてです？ 無理矢理、監禁しておいて」

「問題は警察がどちらの言葉を信じるかですよ。もともと不穏分子の一教師の訴えなんかよりも、学校側の言い分を聞くに決まっているでしょう。それに証拠なんかまるでないんだ。教職員として九時から五時まで学校に

拘束されたからといって、あるいは同窓会の宛名書きをやらせたからといってどんな犯罪になるというのですか——」

さらに山川は、栄宮学園の卒業生の多くが地元の警察へ数多く就職しているといい、ツーカーの仲であることをほのめかしたりもする。

「むろん、そんなデマを飛ばせばあなたを解雇する正当な理由を手に入れたも同然です。こっちとしてはそのほうが手っ取りばやいともいえる」

「火の打ち所がない完全犯罪というわけですか」

千夏は悔しまぎれにそういったが、山川のいうとおりである状況を認めないわけにはいかない。栄宮学園を今、去るのは彼らの思う壺なのである。

「わかりましたね？ 吉沢先生。わかったらさっそく宛名書きを始めてください。ノルマを達成できなければ残業を命じますよ。それと、言葉遣いとか立ち振る舞いとか、そういった社会人として当然身につけていなければならない行儀も、この際徹底的に習得してほしいものです。宮城先生にもいっておきましたが、体育の先生方にはそういったことに立派な人間が多いから、忠告を有り難く戴いて謙虚に身を正してください。わかりましたね。吉沢先生？」

山川の助平ったらしい顔が人見と替わった。

「おら、返事はどーしたんだ、え？」

「立派な方が多い……か」

千夏は人見の凄味を黙殺して呟いた。

「ったく、根性の曲った女だ」

人見はぶつぶついいながら扉を閉めてしまう。

千夏は手のひらでパタパタと顔を煽ぎながら椅子に座った。別に宮城靖の理不尽な命令に従うつもりはなかったし、宛名書きなどする気もなかったが、腰を下ろすとすればやはりそこしかないのだった。

彼らがこうまで陰険な対応をしてくるとは千夏の予想外であった。しかし逆に考えればそれほど千夏の存在を恐れているということかもしれないのだ。自由にさせておくと、何を探り出すやもしれない、と彼らが不安がっているとしたら、千夏が考えていた彼らの犯罪性にもわかにかに現実味を帯びてくるではないか。気に掛かるのは横内まゆみの消息だ。良からぬ事態になってなければいいがと、千夏はそれだけが心配である。

何もすることがないので、OB名簿の余白にこれまでの事件を図式にして整理してみた。

それにしてもこの暑さ。黙っていても汗が噴き出してくる。ボタボタと大粒の汗が手元を濡らした。ハンカチはもうグショグショで絞ると洗濯物のように水分が垂れ落ちる。身体中、こんな状態だから下着だけでなくTシャツも素肌に貼りついて、ブラジャーが浮きだしていた。紺色のシャツだったから良かったものの、白系統だ

ったらきっと乳首まで透けて見えたのではないか。パンティもぴったりと性器に付着してムンムン蒸れさせている。

千夏は口で呼吸をし、ポオーツとしてくる頭を何度も振った。ようやく一時間目の授業が終わったらしく、体育教官室も慌ただしくなってきた。千夏は扉を叩いた。

「ちょっと、宮城靖先生いますか？ お話があります」

「こら、大声を出すなよ」

靖が扉を開けた。そのわずかな隙間からクーラーの冷気が流れこんで、生き返ったような気分になる。

「仕事は進んでいるか。とにかく疎かにしがちな忍耐力を養うのに、ぴったりの仕事なんだから。わかるよな。吉沢先生」

「この部屋はあまりにも暑すぎます。扉を開けておいてください」

「駄目だ」

「どうして？」

「精神が散漫になるだろう。こんなに遅い男性がウヨウヨ近くにいては」

靖は平然と言ったのける。

「馬鹿馬鹿しい。サウナ風呂みたいな場所に閉じこめられていたら、脱水症状を起こしてしまうわ」

「医者でもないお前がどうしてわかる？」

「常識でしょうが」

「素人の診断は良くないぞ。保険体育のエキスパートがこれだけいるんだ。健康管理は任せて、仕事に集中しろ」

「でも……」

「うるさいやっちゃんあ、じゃ、そこに土下座して恭しくお願いしてみるよ」

意地悪い目付きでいう靖。

「どうして土下座なんかしなければならないのよ」

「無能な役立たずが、真面目に労働している人間の手を煩わせたかったら、それ相応の態度を示すのが礼儀ってもんだろうが。いいか。ここではすべてが修業、勉強なんだぞ。ひとつひとつ、監督のいうことに反抗してたら、いつまでもまともな女にはなれやしない。すべては吉沢先生、あんたのためさ。土下座する気になったらまた呼びなさい」

無情にも、扉はふさがれ、再び室内は熱地獄と化した。どうやら彼らは徹底的な弾圧を加えようとしているらしい。

(そっちがその気なら、こっちだって考えがあるわよ)

千夏はそう煮え繰り返る胸のうちで吐き捨てたが、さほど名案があるわけではなかった。考え付いた作戦はふたつ。ひとつは断固、妥協を拝して最後まで闘いぬく、

正攻法の作戦。しかしこれには相当の覚悟と体力がいる。プライドは守れても本来の目的がいち早く成就できるかとなると疑わしい。本来の目的とは横内まゆみを救出し、山川らの陰謀を粉砕するということだ。それにはたとえ口惜しい屈服を彼らにみせようとも、ここは耐え忍び、額を床に擦りつけてでも彼らの信頼を勝ちとってこの状況を脱し、教壇に復帰するのがベストの道かもしれない。そうすれば監視の目もゆるみ、秘密裏に調査を再開できるだろう。

（それにしても土下座しなけりゃならないなんて、まったく……）

千夏は頭髪の根元まで濡らした汗みどろの赫ら顔をふくれさせる。生来の気の強さはたとえ芝居であっても、軽蔑すべきたぐいの男たちへの屈従に割り切れない複雑な心境であった。しかしここは個人的な意地を捨てなければ活路は見えてこないのである。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

頼ずりされる

人見が行ったのをたしかめると、寛治の表情がにわか
に弛んだ。

「悪かった悪かった」と千夏の両頬を両手で挟んで紅
潮している往復ビンタの痕を撫で回した。「こうでもし
ないと、あいつを信用させることも、追っ払うことも出
きんからな」

「じゃ……」千夏はふらふらしながらも、寛治を見つ
めた。

「そうじゃよ。それにあんた、あのままじゃと何かい
いだしそうな気配じゃったからなあ。とっさに強行手段
でカモフラージュしたのじゃ」

寛治の意外な言葉に千夏は緊張の糸がどっと弛み、身
体を寛治に預けた。

「よしよし——」

肩を抱き、ポニーテールの頭髪を撫でながら、寛治は
腹の底でほくそ笑んでいる。

(なんのくんのといっても、所詮、女の浅知恵という
やつだな。騙すのなど、赤子の手を捻るも同然じゃ。ホ
ッホッホ)

吉沢千夏の信頼をそこなうことなく——いやいや、そ
れどころかかえって増しているといっている——サディ
ステックな欲求を満足させられて寛治老人はすこぶる機
嫌のいい顔つきである。手にまだ残る千夏の柔かい頬の
感触が官能的だ。しかも見よ、胸のなかでは二十六歳の

女盛りの肉体のぬくもりがじんわりと伝わってくる、男にとってこの上ない状況にもなっている。じっとりと素肌を濡らした汗の匂いが甘酸っぱくたちこめ、黒髪の芳香とともに鼻孔を刺激するのだった。

「辛かったろう」

寛治はすっかり救援者になりきって、いった。それは吉沢千夏教諭攻略の今後のスケジュールにも重要なところであるのだ。

「よく耐えている。感服しましたぞ。若いのにこうまで自分の身を犠牲にするとは」

「……いえ、行き掛かり上、こうなったままで……」

千夏は寛治の胸から顔を起こし、羞かしげにいった。その顔がぷっくりとふくれがっているのが、なんともおかしく、危うく吹き出すところであった。

「なんのなんの。なかなかできんことじゃよ。そうだ。話を聞いて、これをもってきたぞ」

寛治は懐から冷たそうな缶コーラを取り出した。千夏は嬉声を発してそれをひったくった。リングプルを剥がすのももどかしく、しゃぶりつく。水分に対する飢餓感 は凄まじいばかりで、寛治の視線など忘れ喉をゴクゴクと鳴らすのだった。

(壇だともっといい顔が拝めたのにな)

老人はそれでもじゅうぶんに浅ましい千夏の飲みっぷりに目を細めている。最後の一滴まで喉に流し込むと、

千夏はまだ足りないのか、舌ペロを大きく差し出して缶の表面についた水滴まで舐め回してしまう。

「……いやだわ。私……」

自分の女とは思えない欲求だけの行動に、千夏は苦笑せざるをえなかったが、寛治はいやいやと手を振った。

「こんなサウナのようなところに放りこまれているんだから当たり前じゃ。気にすることはないぞ」

「寛治先生」と千夏はいった。「私、結局、横内まゆみを助けることができませんでしたわ」

「うーむ。それを思うと少々、辛いところはあるな。わしだって協力を約束しながら何もすることができなかったんだから同罪じゃよ」

巧みに協調関係をちらつかせる。孤独な囚人には拒絶しがたい苦悩の表情だろう。

「しかしだ。まったくこちらに光がないかというところでもないのだぞ」

「どういうことですか」

食い入るような千夏が目付き。藁をも把みたい心境だ。

「あんたがこうして耐えているおかげで、やつらもずいぶん気が大きくなっているようじゃ。もう何も怖いものもなくなったということじゃろ。まさかこのわしが敵だとは思ってもよらぬじゃろうからのう。ホッホッホ」

「で、光とは？」

焦れったださそうに千夏は尋ねる。

「山川の奴め。横内まゆみが千葉の風俗店で働いてお
ることをポロツと洩らしおった」

「千葉……」

千夏は絶句した。まゆみが売り飛ばされた先は千葉だ
ったのか。

「まだ千葉のどこか、あるいは店の名前までは定かで
はないが、このまま内偵を進めていけば、いずれ白日の
もとになるのは時間の問題じゃ」

「寛治先生！」

千夏は寛治に期待のこもった瞳を向けるのだった。

「よしよし、みなまでいうな。わしも老骨に鞭打って
全力を尽くすから、あんたも頑張るんじゃ。辛かろうが
のう」

ドラマであればここでもう一度、ガバと抱き合う師弟
の図が想定できる。寛治も期待したが、さすがに女教師
だけあって、そこまではプライドが赦さないらしい。

(ケツ、もっともっとシゴキを加えてやらんといかん
らしい。靖にもハツパをかけてやらないと)

寛治は表面ではうむうむと頷きながら恐ろしい計画を
考えていた。

人見先生の足音が近付いてくると、寛治はガラリと態
度をかえた。千夏は当然、演技だと信じているわけだ
が、寛治はそれをいいことにまた少しサディズムを楽し

める。

「ウリヤッ、何度いったらわかるんだっ。この小雀
っ」

突如、立ち上がった寛治は千夏の腰を荒々しく足蹴にした。千夏はあっと叫んで引っ繰り返った。寛治はまだまだ赦さず、首根っ子を掴んで強引に引き起こすとまたまたビンタを炸裂させた。

ジーンと衝撃が脳髓を痺れさせた。いささかやりすぎだと千夏は思ったが、寛治に対する信頼は揺るぎないものに成長しており、林檎の頬っぺたにされても疑いはもたなかった。

「寛治先生、買ってまいりました」

「これはご苦労」

「どうですか。吉沢の根性は」

「まったくなっておらんわ。お前たちはいったい何をしておるのだ。こんな小娘一人、さっさと御せんでどうする。生徒が風紀を乱して退学するのもすべてお前たちがたるんでおるからじゃ」

寛治に一喝され、面目丸潰れの人見は血相を変えて千夏に踊りかかった。

「貴様。寛治先生に何をいったんじゃあ！」

「な、何も失礼なことは……」

人見の剣幕に怯えて、千夏は寛治に助けを乞うように視線を向けたが、寛治はさり気なく頷くだけ。その目

は、耐えるのじゃ、といているようであった。いきりな黒髪をわし掴まれて右に左に大きく揺さ振られた。顔だけでなく、身体も飛ぶように、である。小柄なだけにいいように弄ばれる。目が回っているところへ、軽く平手打ちがかまされた。

「ヒッ、助けて！」

「甘えるんじゃねえ、阿女っ」

人見はとうとう千夏の鼻をつまみ、いやというほどねじりあげた。

「ングッ」

そして突き飛ばすと、仰向けに倒れた彼女の二肢を抱え込み、ゴロリと俯せに返し、自分はその柳腰に逆さ乗りに馬乗りになって、小脇に脚首を挟む要領で、逆海老固めに入るのである。どうやら、ここの体育教師たちは皆、プロレスファンらしい。身長156センチの吉沢先生が体重百キロはあるかという巨漢に伸しかかられてはまったく無抵抗で、悲鳴すらあげられず、呻きを洩らしつつただ自由になる両手でバタバタとござを叩き、苦し紛れに搔き毟るばかりである。

グイグイと人見は腰を責めたてる。ちょうど、寛治の位置からは千夏の折れ曲って逆立ち状態になっている下半身が正面に見えたが、彼女のジャージの上着がめくれあがり、臍窩がさっとあらわになっていた。まだ贅肉ひとつついていない下腹は苦痛に大きく喘いで肋骨を透か

せている。もうちょっとでズボンもずれこんで、パンティの一部が露出しそうであったが、まさかそうすると命じるわけにもいかない。それはこれから先のお楽しみだ。

「どうだっ。まいったか！」

人見は金切り声を発しつつ、これでもかこれでもかと絞めあげる。

「うーん——まいった」

顔を真っ赤にして床に押しつけている吉沢先生はそういうしかなかった。人見は何事か罵りながら、彼女の身体から尻を上げた。暴虐の嵐が去っても千夏はしばらく動けなかった。

「いつまで休んでんだよ。さっさと仕事せんかあ」

罵声とともに千夏は自分の肩に激しい灼熱感を覚えた。見上げると、人見は剣道の竹刀を手にしていた。あれを打ちおろしたのだ。その先端で今度は千夏のウエストのくびれを小突き、押し込んだ。暴力はエスカレートするばかりだ。気が付けばすでに宮城寛治の姿は消えていた。再び孤立無援の闘いが始まるのだ。千夏はノロノロと起き上がり、宛名書きのペンを取った。

それから二三日は、千夏は反抗的な態度を見せずに作業に打ち込んだので、殴られることはなかった。鬼監督官たちもなんの理由もなく嗜虐の欲求を爆発させるわけにもいかないらしい。しかし理由はいくらでもつけられ

る。

その日は昨夜の熱帯夜を引きずったうだるような暑さの一日で、教官室の反省室のなかは一日中、四十度にも達する熱地獄と化していた。もちろん仕事ははかどらず、五時を過ぎてもノルマを達成できなかった。

「なんだとお！」土下座し、謝りつづける千夏を靖は一喝した。「貴様、その程度の単純な仕事もロクにこなせないで、教壇に復帰できると思っとるのか！俺たちがこれほど親身になって付き合っただけなのに、そのザマはなんだ。おちよくってるのか、貴様！」

また往復ビンタの制裁を覚悟している千夏に靖は宣告する。

「よーし、今日はちょうど俺が当直の日だからな。お前にとことん付き合っただけで、残業でし残した分、すっかり片付けるんだ。わかったか！」

「……」

「なんだ、その顔は。何かいいたそうな表情だな。ン？ いってみな」

靖は竹刀を手で弄び、千夏の疲労した美貌を覗き込む。

「……いいえ、何も……」

「靖先生、この女、アレの日なんじゃないですか」人見はニヤニヤしながら耳打ちする。

「アレ？ なんだ、お前、生理だったのか」

靖は大声で千夏にいった。千夏は消え入りたげに小さく頷いた。

「そうかそうか。千夏もやっぱり女だったんだなあ」
帰り支度を始めていた他の教師たちもぞろぞろと反省室の前に集まり、小さくなっている千夏に好奇の視線を投げ付ける。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

公開尻叩きなんて……

「生理なんて関係ありませんわっ」千夏は憤然として否定した。「そして靖先生の供述は何から何まで嘘っぱちであると言わねばなりません」

「ほほう。彼の股間をキックした事実はないというのだね？」

「いえ、それは……つまり身を守るための正当防衛ということです。非難されるべきは靖先生の行動にあるのです」

千夏は顛末の一部始終を彼らに話して聞かせた。

山川は腕を組みながら白々しく呟いた。

「——つまり二人の言うことは百八十度、違うってことだなあ。ねえ、主任」

「そうですね。しかし私はいまひとつ腑に落ちませんね。あの靖先生が——柔道三段ですよ——吉沢先生のような弱い女性にやられますかね」

「まあ、それはもっともな疑問ですねえ。吉沢先生、そののところでもう少し詳しくお願いできませんか」

「ですから、組み伏せられまして、もう絶体絶命というところに追い込まれたので……」

「顔がヌッと近付いてきたんですな」

山川は目尻を下げて、身を乗り出してくる。今日はまた一段と額のテリがギトギトしている。

「そ、そうですね。だからこれは他に手はないということで、いったん受け入れるような振りをして、油断を誘ったんです」

「キスさせたんだね？」

「ええ……」まるで自分が悪いように、千夏は目を伏せた。

「やっぱり誘惑したわけだな。靖先生の供述に間違いはないじゃないか」

鈴木がたたみかけるのを、山川が制した。

「鈴木主任。それはちと酷というものでしょう。貞操を守るためには唇くらい奪われても仕方がない、と判断したのはこの状況ではやむをえないと思いますよ。吉沢

先生だって処女じゃないんだから、キスくらいはどーってことないでしょう」

これでは千夏をかばっているのか、皮肉っているのかわからない。

「——で、靖先生はものの見事に引っ掛かって、隙を見せたんですな？」

山川の問いに千夏は頷いた。

「ちょっと出来すぎてませんか、教頭」鈴木は言った。「こういっちゃんだが、吉沢先生にあの硬骨漢の靖先生をたぶらかすだけの性的な魅力があるとはとても思えません」

「主任、吉沢先生をブスだと言いたいのかね？」

「さあね。ブスとまではいかなくとも罪に問われる危険を冒してまでモノにしたい女性ではないでしょう。目は細いし、オッパイだって小さいし」

鈴木と山川はしげしげと千夏を凝視するのである。

「……あなたたち、いったいここに何をしにきたのですかっ」

千夏はカッときてテーブルを叩いた。

「私を侮辱するんだったら、もう帰ってください！」

「どうやら自分を美人だとうぬぼれているらしい」二人は嘲笑した。

「違いますっ。私はただ……」

「いやいや吉沢先生、我々は可能性を考えているだけ

ですよ。事は人の一生を左右する重大な話ですからな。どちらの言い分に、より信憑性があるか、あらゆる角度から考察してみなければならぬ。そうでしょう」

山川はピタピタと正論をついてくる。

「いっそのこと、その時の様子をここでやってもらってはどうですか？」

「お、実況検分か。それもひとつの手だな。もし吉沢先生が真実を語っているのであれば、よりリアルに再現できるわけだし、吉沢先生の性的魅力がどれほどのものなのか、我々が判定できる」

「馬鹿馬鹿しい」

千夏は呆れて吐き捨てた。

「どうしてですか？ 警察では当たり前の方法でしょう。それともできない理由でもあるんですか。というより、思い出すような事実がそもそもなかったんじゃないんですか？」

「あなたたちは、ただ、淫らな興味を満足させるために強要しているだけだわ。ここで、私に引っ繰り返ってキスをねだるところをやってみせろというんですか！」

「その時のあなたの表情がどれほどエロチックかで、話の真偽が決まるんです。せいぜい腕によりをかけて、挑発してみせてくださいよ」

山川はそう言うと、千夏の腕を掴んだ。

「な、何をやるんですっ」

驚く千夏。しかし鈴木も立ち上がり、もう片方の腕を抱えた。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

牝チンパンのケツ

どんよりとした曇天の下で、尻叩きは続行されていた。五発目くらいまでは千夏も悲鳴を押し殺していたのだが、腫れあがってきたところへ、さらなる痛打は威力を倍加させるのだ。とてもこらえられるものではなかった。

「ああッ——」

千夏は一瞬、喉を突きだすように天を仰ぎ、そしてがっくりと首を垂れた。

（この爺さん、本当に手加減しているのかしら）

さしもの信頼も揺るぎかけたが、渡されたプロテクターをしなかったのが悪かったのかも、と思いなおす。

「へへ、千夏、鼻の頭まで玉の汗がびっしょりだぜ」

悲鳴は自分と同様あげるくせに横の靖ときたら、ほとんど応えている様子もなく軽口を叩く余裕さえあるの

だ。

「……う、うるさいわね。ヒッ」

たまらず千夏は突っ伏してしまった。

「なにやっとなのだ！ 吉沢あああ！」

寛治老人はド迫力の罵声を浴びせて、千夏の脇腹を蹴りあげた。

ノロノロと起き上がる千夏に、追加五発の冷酷な宣告がなされる。

いつしか千夏の頭髪を束ねていたゴムが切れ、ざっくりと乱れ髪が赤ら顔をおおった。ほとんど表情はその中に埋まったが、ただ鼻先だけがポツンと見えてい、そこから大粒の汗がボタボタとしたたり落ちている。

二十発台にさしかかると、もう自分の腰部の感覚がなくなりかけているのだった。ただただ尻が熱い。火照り狂っている。身体全体もホンワカと体温が上昇し、眠気さえ催しはじめた。しかし苦痛は依然として苦痛であった。喉が擦れて、ときおり、ヨダレすら垂らす惨状である。顔全体が脂汗にヌラヌラと濡れ光り、悪い病気にでもかかったようだ。

「千夏も髪を下ろすとけっこう色っぽいじゃないか」

靖にからかわれても、クナクナと首を振って黒髪に惨めな表情を埋めるだけで、言い返す気力も起こらなかった。それにしても、靖はどうしてあんなに飄々としていられるのか。男と女の差といってしまうえばそれまでだ

が、納得がいかない。いや、臀部の皮下脂肪なら女のほうがずっと豊富なはずではないか。どうして？ 千夏は寛治が身内の情に負けて、自分ではなく靖を手加減しているのではといぶかった。チラリと後を振り返ると、ちょうど寛治が山川の手から竹刀を交換しているところだった。

「……」疑念が脳裏に踊った。「ちょっと待ってください」

「なんだ」寛治はうるさそうに言った。

「どうして竹刀を取り替えるのですか？」

「ん？ 当たり前じゃろ。一本ではすぐに脆くなってしまう。お前らの尻の皮は厚いでな」

失笑する山川と鈴木。

「なんだか、靖先生のほうが細いみたいだわ」

「細いほうが力が一点に集中して苦痛が大きいのだ。女と同じ打撃では男の儲けになってしまう。それでは不公平だろ」

「一度だけ、そっちの竹刀でぶって頂けませんこと」

「吉沢先生、寛治先生を信じないのですかな」

山川が間に入ってきた。

「いいえ。ただ靖先生の痛みも分かちあいたいと思いまして」

「うまいこと言って。少し休みたいものだから、いちやもんつけてるんじゃないの」と靖。「叔父さん、これ

は立派な処罰の忌避行為だよ。もう五回追加だ」

「靖、お前という奴はどこまで幼稚なことを言うておる。身内ながら恥ずかしいぞ。吉沢は純粋な気持ちから申し出ておるんだ」

「どーしてわかるんです」むくれる靖。

「顔を見ればわかるわい。自分の罪を反省し、進んで罰を受けようという殊勝な色が滲んでいるぞ。よーし、その心意気、受けてやろう。こっちの竹刀で打ってやるぞ」

寛治の言葉に山川も鈴木も、そして靖も、「え？」という表情になっている。そうしてしまえば今までのズルが千夏にばれてしまうのではないか。しかし寛治にも魂胆があった。千夏が打擲に備えて顔を正面に戻すと、すかさず二本の竹刀をまとめて握ったのだ。男たちは合点がいてほくそえんだ。

「これが靖の受けていた痛みじゃ、こらえてみい！」

寛治は吠えたて、着物の裾を翻し、まるでゴルフスイングのように千夏の尻をバシッと叩きのめした。

「おおッ！」

千夏はそれまでで最大の激痛と衝撃に前のめりに飛び、畳の縁を越えて玉砂利のなかへ顔面から突っ伏した。

「痛っ……」

こんな恐ろしい衝撃を靖先生があれほど涼しい顔で耐

えていたのかと思うと、さすがに驚くしかなかった。自分ならば二発か三発でギブアップだろう。男の肉体とはどれほど強靱なのかと、何も知らない千夏は感心した。そして宮城寛治に対する一抹の疑念も雲散した。やはり彼は自分に多大な手加減を加えてくれていたのだ。一瞬でも疑いをもった自分を恥じた。

その寛治はさっさと束ねもっていた二本の竹刀を一本に持ちかえ、

「吉沢千夏、心意気は買うが規則は規則じゃ。姿勢を崩したのだからもう五発、追加するぞ。さあ、起き上がれ！」

と、冷酷非情なハッパを千夏の背に浴びせかけるのである。

結局、千夏は計十発の追加となっけてしまい、先に終えた靖の嘲笑を浴びながら万座の視線のなかで、ただ一人、這いつくばって尻をくねらせ、悲鳴をあげつづけたのだった。

「四十っ！」

寛治の声を聞くと、千夏はどっと突っ伏した。大きく呼吸するにつれ、肩が上下している。青畳にこすりつけている顔はべっとりと汗で濡れ、さすがに泣いたらしく瞼と鼻の頭がほんのり赫くなっている。

男たちは吉沢先生のジャージのズボンの臀部を注目する。そういう目で見ると、そこは打たれる前より大

きくなったような気がした。しかし千夏本人の感覚では通常の倍くらいに腫れあがったというのが実感だった。ズキズキとする痛みはもちろん、蠟燭の炎で焙られたようなたまらない苦悩が、まだちっとも収まらないのである。

山川と鈴木が駆け寄り、腕を取って引き起こした。

「ああ……」

おどろに乱れた黒髪が美貌にかかり、汗に貼りついて凄惨な顔となっている。

「ほら、吉沢先生、しゃんとしなさい。なんです、いい若い者がこの程度でだらしがないですよ」

山川はふらついている千夏にハッパをかけ、彼女のほつれ毛を梳きあげてやる。もはや彼女の前髪を額に垂らしたヘアスタイルは跡形もなく、靖が言ったように大人の女の色香がかえって増しているようだった。

「ヨダレまで垂らして、きったねえな、千夏」

靖は自分の股間を蹴飛ばした小憎らしい女教師の、ぐうの音もでないザマにいささか溜飲を下げていた。

「よし、部屋に連れていけ。靖。柔道部の女子部員に傷の手当てをさせてやれ」

寛治は千夏に恩を着せるように命じた。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

女三助

この屋根裏部屋には照明器具がまったくなかった。かろうじて、灯り取りの窓から入ってくる月明かりだけが千夏の絶望感をほんの少し癒してくれる程度にすぎない。

身体中の水分をすっかり絞りとられたように、千夏は疲れ切った表情をしている。それほど臀部を中心にした下半身の苦悩は凄まじく、女教師を泣かせたのだ。ウエストから下は感覚がなくなっている。背筋から首の筋肉にかけてピリピリとした痺れが残っていた。何度も頭をグルグル回して、それを振り払おうとしても悪魔の長い指に掴まれているような不快な感覚はなくなってくれなかった。

しかし千夏がもっとも危惧しているのは、階下の人々が自分の存在をすっかり忘れてしまったのではという疑念であった。九時に迎えにくると、映子と静江の言葉はあったものの、物音ひとつ聴こえてこない屋根裏部屋に何時間もとり残されていると、そういう思いはどうしても募ってくるのだった。昼食も口々に食べていないので、空腹感はかなりのものだ。そして、このままの状態

で放置されていれば、いずれ訪れるであろう、排泄の生理現象をどうすればいいのか。そんなことを考えると、居ても立ってもいられなくなってくるのである。

これまでの様子からして大声を張り上げたとしても他人の耳に届く可能性はほとんどないと思われたが、千夏は消耗した体力気力を振り絞って、大声で助けを呼んだ。何度も何度も繰り返したが、声は屋根裏部屋から少しも漏れていってくれないようであった。とうとうそれにも疲れ果て、千夏は力尽きたように浅い眠りに落ちていった。

揺り起こされたのはそれからしばらくたってからであった。

「おやおや、人が稽古しているときに、女子マネは高躰かい？」

傍らに腰を屈めた静江が吉沢先生のほつれ髪を梳きあげた。

「ああ、良かったわ……」

彼女たちの姿を認めると、千夏はほっとしたように言った。

「何が良かったの？ 変な先生ねえ。ほら、ヨダレ啜ってよ。汚いわねえ」

「ご、御免なさい。皆、忘れちゃったんじゃないかと思って」

「忘れるわけないでしょうに。どんなペットだって来

たては誰にも可愛がられるじゃない」

静江と映子は千夏の四肢を拘束していたロープをほどいていった。二人とも柔道着からトレーニングウェアに着替えている。

「ああ、痛かったわ」

手首を擦りながら思わず呟く千夏。

「先生、藻掻いたんでしょ。だから締まっちゃったのよ。馬鹿ねえ」

「そ、そうよね……」

手足が自由になった千夏は慌ててパンティとジャージのズボンを履きなおした。汗を絞りとられたせいも、お尻の腫れは少し引いたみたいだった。

「さて、これから先輩たちの背中を流しにいくんですよ。まあ、ここでは新人女子マネの待遇とういうわけで、先生ということのを忘れてキビキビと働いてもらわないと困りますよ」

静江は千夏の肩を叩いて言った。彼女の身長は一七十センチほどもあり、千夏は見上げて話さねばならない。そのへんのところをよくわかっているらしく、静江も映子も体力の違いを誇示するように千夏の両側に胸を突きだすように立つのである。まるで小学生を中学生が脅しているような感じだ。相手の弱点をことさら強調して優位に立とうとするのは、格闘技では常識なのだろう。

千夏も、自分のチビさ加減は今に始まったことではな

いので慣れてはいるはずだったが、教師というれっきとした社会的身分が停止された現在は、なんだかそんな幼稚な高圧的態度にもすくみがちである。都市生活者がジャングルに放り出されれば頭脳の出来具合など吹き飛び、ただ肉体の頑強さが人間関係を序列づける。同種の雰囲気なのだ。

「その前に——」と千夏は言った。「寛治先生に会えないかしら」

寛治に会って、この非道ぶりを訴えるつもりであった。もちろん、三助など、いわれなき懲役労働も撤回してもらおうつもりである。

「寛治先生に会って、どうするんですか」

静江が顔を近付けてきた。

「ちょっと話があるのよ」

「話ってどんな？」

「たいしたことじゃないんだけど……」

「じゃ、この次にしたら？」

「それがそうもいかないのよ」

食い下がる千夏。

「たいした用でもないのに、今日じゃなければいけないんですか？」

千夏の矛盾をあげつらって失笑する静江だ。

「それなら靖先生に言えばいいでしょう。連れてってあげますから」

映子は意地悪い表情で提案した。

千夏は慌てて手を振った。

「靖先生じゃ駄目なのよ。寛治先生でなければ」

「とにかくっ」と映子は千夏の要求をキッパリ拒絶するように大声をあげる。「寛治先生には会えません。寛治先生は朝が早くていらっしゃるので、もう就寝中です。それに寛治先生は我々のような若輩者が気やすく話をしていい相手ではないのです。おわかり頂けますね？」

我々若輩者と、映子が言う中に自分も入っているのかと、千夏はムツとしながらも従わざるをえない。あまりしつこく要求しても勘繰られるだけであろう。靖のところに連れていかれては、厄介なことになる。

「じゃ、行きましょう」

連行官よろしく、映子と静江は千夏の腕を取って、歩きだした。

階段を下り、二階の廊下に出る。

「そうだ」と千夏。「汗掻いちゃったから、私もお風呂を頂くわ。荷物がその部屋にあるの。着替えとタオルをもっていってもいいでしょう？」

千夏の言葉に二人の生徒は不機嫌そうな顔つきになる。その様子ときたら、すっかり千夏の保護者然としているのだ。

「新人の入浴日は今日ではありません」

ピシャリと言われて、取りつくしまもない。今、千夏がその部屋に一步足を踏み入れれば、部屋中に散乱した自分の下着と、その上で陶然としながら酔い潰れ眠りこけている醜い中年男たちの半裸を目にして仰天しただろう。しかし女教師はニキビ面の大女二人に肩をド突かれてその場を通りすぎるしかなかった。

風呂場は一階の裏手にあった。道場のすぐ隣である。稽古の後、すぐに飛び込めるようになっているのだ。その前に来ても、千夏はまだふんぎりがつかないのだった。なぜ自分がこんな真似をしなければいけないのか。三助だなんて、いったいどうして……。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

千夏絶唱

千夏は眠りの途中で揺り起こされた。静江と映子の顔が覗いている。

「先生、いつまで寝てるんです。さっさと起きて。食事の時間ですよ」

煎餅布団の上でタオルケット一枚にくるまりながら死

んだように眠りこけていた千夏は、その言葉にびんと反応して重い瞼を開いた。

「ご飯？……」

むっくりと起き上がる千夏。皺くちあのジャージに、ボサボサの髪。身体中がまだ痛い。そして鉛を吞まされたように気怠いのがあった。昨日は人生最悪の日とってよかった。その名残がすべて身体に刻まれているのだ。

「痛ッ——」

千夏はうっかり座ってしまい、臀部に走る痛みに顔をしかめる。腫れはひいたものの、打ち身は全然治っていないのである。

「ほら、早く立って」

「今、何時？」

「五時半よ」

「五時半！」

頓狂な声を上げる千夏だ。昨夜、お湯をいやというほど浴びたせいか、目を剥いたその顔はゆで卵のようにツルツルしている。

「もう少し寝かせて。まだクタクタよ」

「寝坊なんてしたら、どんな目に合わされると思ってのよ。昨日、原島先輩に散々、可愛がられたくせにもう忘れたの。炊事をサボったらあんなもんじゃ済まないのよ」

そう言うと映子は上着の襟足を掴んで強引に立たせ

た。

「ヨロヨロしないでシャンとして歩きなさい」

急な階段に足元のおぼつかない千夏を叱りながら、静江と映子は彼女の前後を固めている。

千夏はその間をすりぬけるようにして、彼女の引越し荷物が運びこまれた部屋に駆け寄った。

「こらこら、勝手なことをしてる時間はないんですよ」

静江が上着の背中を引っ張って、中へ入れようとしな

い。「どうして？ 下着を替えるからここに入れて」

「あとあと。今更めかしこんだってしょうがないでしょう」

「めかしこむわけじゃないわよ。汚れたから替えるんだってば」

「汚れたって……生理？ 先生」

顔を覗き込む静江。

千夏は首を横に振った。

静江は、なーんだ、という顔をして、「じゃあ、いいじゃないの。せいぜい汗がしみ込んだ程度でしょう。そんならノーパンノーブラになればいいだけよ。どうせペチャパイでブラなんかいらんないんだからさ」

「四の五の言っていないでさっさと行く行く」映子が急ぎ立てた。

以下は有料本編でお読みください。
#####